
デビル・ジュエリー

ボロズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デビル・ジューエリー

【Nコード】

N9127R

【作者名】

ボロス

【あらすじ】

人々を惑わすと言われる宝石があつた。

宝石はこの世界で術の媒体となるもの。

皆、こぞっていい宝石を求め、冒険者となった。

あらゆるところで古代遺跡が発見され、純度の高い宝石はマラリスと言われるようになる。

しかし、あるマラリスが発見される。

そのマラリスの出現により、この世界は大きく変動していく…。

一日2000字は更新したいと思っています。
誤字脱字等ありましたら教えてください。
お願いします。

毎日0時に更新する予定です。

少しの間、お休みします。申し訳ありません。
予定では6月ぐらいからは更新できようにします。

赤眼のレリク篇 第一話

「よう、こんなところにいたのか？レリク。」

俺の名はレリク。最近では名をよく呼ばれるようになった。術が宝石を媒体にして具象化するという方法が編み出されて、もう200年も経っていた。そのころから冒険者が増えてきて多くの古代遺跡ダンジョンが発見された。古代の王や王族は宝石で着飾っていることが多く、それをこぞって人間は求めたのだ。掘って宝石をとろうとしているのは貴族だけで今では冒険者がとってきた宝石がほとんどだ。しかし、その中には稀に純度がかなり高いものが含まれる。それはマラリスと呼ばれ、市場に出ればかなりの高額になるがほとんど市場に出回ることはない。もちろん、その冒険者が使用するからだ。術というのは本来、個人の力量によるところが多い。体内にある術エネルギーと呼ばれる源が尽きれば術は使えなくなる。死ぬことはないが空っぽになってしまえば、歩くのがやっと。それが古代遺跡内であつたならば、深刻な状況になる。それを底上げできるのが宝石なのだ。純度が高い宝石なると1〜2段階ぐらい術のレベルが上がることになる。結果的に術エネルギーの消費を抑えることができる。

俺は親父が騎士ということもあつて槍を使う。ダンジョン内では不向きなことも多いが遺跡のように地下にあるものもあれば、森自体がダンジョンになつているようなものがある。そういうところでは槍を使うことにしている。それ以外のときには剣を使っている。術には系統がある。火、水、土、雷、風、木、光、闇の八つの系統にわけることができる。1つでも使うことができるがだいたい人間は2つの系統を持っていて、それを組み合わせる術として使うことが多い。もし、1つの系統だけで勝負したならば優劣がつきやすく、しかも防ぎ方も簡単になつてしまう。たいていは自分で試行錯誤して、自分に合った術を見つめる。たまに、何一つ使えない「旧人類」

と言われる人たちもいるらしい。俺はあったことがないのだが…。もちろん、術は武器にもまとわせることができるが、それにはかなりの集中力が必要なので一部の者だ。

俺ももう25歳になった。世間的には若い。このところ戦争が多いので平均は出しにくいだが、だいたい60歳ぐらいだ。まだまだやれると思うかもしれないが、冒険者は30代に入ると激減する。あるものは怪我で、女を作って止めてしまうものもある。そして死ぬものも多い。運命の年といわれているのが20歳。こちらでは16歳で成人とみなされるのでだいたい4年から5年。その間に運命がわかる。死ぬのが多いのもこの年。冒険者にとっては厄年となっている。

30歳を過ぎたら体力的にしんどくなってしまう。しかしながら30歳まで続けられる人があまりいないので、そう言った人たちは騎士や傭兵として登用される。はつきり言う超ベテランだからね。数々の修羅場を潜ってきた彼らを登用したいのは無理もない。いつも戦争が起きているわけではないのだから。今も戦争の準備のために登用を開始している。いつ戦争が起きてもいいように。

「おい、話を聞いているのか？レリク。」

「すまん。もう一回言ってくれないか？」

「全く…。」

「すまない。テディー。少し考え事していな。」

「まあ、いい。今、ダンジョンに入るメンバーを募集している。噂ではマラリスがあるということだ。だいたいマラリスがある場所には強いモンスターがすみついていることが多い。今回もかなりのモンスターがいるのではないかということらしい。」

そうなのだ。マラリスあるところに強いモンスターあり。これはダ

ンジョンではよくあることだ。冒険者が危険だというところにはそこは入っていない。そこにいかなければいいことだから。普通のダンジョンでも生活には困らない程度の鉱山があったりする。しかし、ダンジョンというのは入り方ですぐいぶんと違ったことになる。たとえば、季節によっても死亡率がかなり違う。たとえば夏と冬は死亡率が高いとかな。もう一つはモンスターの種類が変わることがある。弱いモンスターは気候によって強弱がつくことが多く、比較的入りやすいダンジョンでもそれなりの準備と知識が必要となってくる。だからこそ、冒険者というのは意外と知識があつたりするのだ。モンスターの襲撃の際に傭兵を雇うのもこの辺が関係してくる。騎士にも1人、冒険者上りがいればある程度知識を共有できるから、そういう面では冒険者も役に立っているわけだ。今は春だから過ごしやすい気候といえるが反対にモンスターも夏と冬に活動を活発にする奴も同時にいる季節だ。いい面も悪い面もある。

「さて、どうしたものかねえ。今はそんなに金に困っているというわけではないし…。それはテイデー、お前もじゃないか？」

「そうだな…。俺ももう29歳だからな。お金がどうこうというわけじゃないんだ。今回が最後というつもりで行く。まあ、最後までいいはマラリスぐらい手に入れたらと思つてな。」

そう言つて俺の腕輪に視線を向けた。

赤眼のレリク篇 第二話

俺のしている腕輪はマラリスで間違いない。激闘の末に手に入れた品だ。マラリスというのはかなり特殊な宝石だ。先ほど説明したように術のレベルが上がるだけでなく、それ以外の付与術といわれるものがついてくることがある。有名なものだと言われている。その中でも俺が持っているこのマリアは変わっていて、火のレベルが6段階ほど上がるというものだった。俺は運よく火が特に得意だから、火の能力で右に出るものはいないと思っている。しかし、激闘の末に右目を失ってしまった。縦に1本だけ。この傷が深かったわけではないが、モンスターが毒を付与して最後に攻撃したらしくそれ以来右目は見えないままだ。開けることすらできない。だから俺には二つの名がある。「炎帝」・「赤片目のレリク」。この二つの名はここ最近よく知られるようになった。最近では傭兵の話や騎士への志願の話が来るようになった。引退してからそっちの道に進むのも悪くないと思っている。そのほかには木を使えるのだが、今でも術を組み合わせることができないでいる。火のレベルが違いくすぎるからだ。昔はかなり不安だったが、今はマラリスのおかげもあってずいぶんと楽になった。髪の色が赤になってしまったのは不本意だったが…。目も赤くなってしまったし…。医者には問題ないと言っているけど…。

「どうする？お前がいるとずいぶん楽になる。来てくれないか？」
「テディー。お前に行く必要もないだろう？メラル帝国から勧誘が来ているそうじゃないか。今さら危険を冒すこともないだろう？お金にも困っていないと言っていたし。」
「そう言われればそうなんだがな…。」

現在、大きく分けて四つの国がある。その前にこの世界には大きな

大陸は二つしかない。一つはメラル大陸。もう一つはクトル大陸。メラル大陸はクトル大陸の半分しかない。メラル大陸にはメラル帝国がある。クトル大陸にはメジス国とイクト共和国がある。メジス国が北半分を支配し、反対にイクト共和国は南半分を支配している。後島国からなるガジス連邦がある。だいたいの戦争はメジス国とイクト共和国の戦争が主だ。この二つの国は考え方が大きく違うし、発展の仕方も違う。ガジス連邦は静観していることが多い。そしてメラル帝国はここずっと戦争の準備をしていると噂されている。この3つの国々はそれぞれ得意分野があるために一進一退を繰り返している。イクト共和国は術にすぐれ、メジス国は騎士のレベルが高く、機動力に優れる。そしてメラル帝国は兵器をたくさん持っている。しかし、この3国はガジス連邦には攻め入ることはない。内々の密約が交わされているということもあるが、それだけではなく、山などでも少ないとみられるためにあまり注目されていない。他にも小国家があるがこれが主な国だ。この世界の変わっているところは季節が大きく分けて四つある。春夏秋冬だ。もちろん、一部砂漠だったり、熱帯雨林が茂っているようなところもある。そういうところ、ダンジョンが多いので困っているのだが…。

「マラリスを持っていると有利だろ。さすがに騎士になったからと言って、すぐに突撃して死ぬのはごめんだからな。モンスターは単純だからいいが、人間が相手だと何考えているか分からないから怖い。」

「大局を見据えた戦略はそんなにないだろうと思うのだが…。言われればそうかもしれない。あることに越したことはないよな。」

「レリク。お前は前の大戦に参加しただろう。その時にはどう思ったかは知らないが、ずいぶん沢山の人死んだだろう。お前の親父さんも戦っていたそうじゃないか。」

今から2年前、俺が大砂漠のダンジョンでマラリスを手に入れてか

ら、少し療養している間に傭兵として雇われることになった。ここ100年ぐらい起きていない大きな戦争だった。メジス国が10万、イクト共和国が8万。凄い戦いだった。いたるところで術が放たれ、弓矢が降ってくる。まるで雨のように…。互いに一步も引かなかつたが、あまりに消耗が激しくメラル帝国が介入しそうなので、講和が行われた。双方合わせて戦死者4万人、重傷者3万人を超える最大といえる戦いになった。俺はイクト側に就いて、騎士防衛の作戦に参加した。騎士は機動力を生かして他方から攻めてくる。イクトにも騎士がいるがそれだけでは全く歯が立たないため、傭兵を配備し対抗した。あちらの大将を討てば終わるものだ。特に騎士は指揮系統がしっかりしているから、そういうところが欠点としてあげられるが…。

赤眼のレリク篇 第三話

「違う。お前が戦ったんだよ…。まさか親子だと思わなかった。知った時はびっくりしたもんだ。」

「そうか？あまり似てないからな。しょうがないのかもしれない。」

俺は初めて親父と対峙して分かったが、すべてを背負う覚悟ができていた顔だった。俺を殺せばおそらく騎士としては権限が剥奪されるかもしれないと分かっている、俺に剣を向けた。対して俺は槍。まさに逆のような感じだった。普通、騎士は槍、冒険者や傭兵は剣を使う。俺たちの戦いは死闘だった。俺が傭兵の中で大将となっていて、親父は突撃部隊の大将だった。お互いに引くに引けない状態だった。俺たちは結局3時間戦い続けた。次の戦闘に備えることができないほどに体力を消耗した。

「今でもあの戦いは伝説になっている。俺も見なかった。」

「そんなにたいしたものじゃなかった。お互いの嫌がることばかりやっていただけさ。結局引き分けに終わったし。まさかメラルが介入してこようとは思わなかった。それでよかったのかもしれないが。」

「そうだな。あのまま続けば、今よりも傷痕は深かっただろうな。」

それももう間もなく切れようとしている。あれから3年。どうなるかね…。おっと話が脱線したな。明日までに返事をもらいたい。人数は30人ぐらいいるから大丈夫だと思うが。」

「30人？そんな大がかりなダンジョンなのか？」

普通、ダンジョンに入る時でも4人ぐらいで編成していくのが常識だ。あまり多すぎたら、指揮系統が混乱して統率をとるのが難しくなる。俺も目を失ったときに1人で入ったのを後悔したものだ。ほ

とんどの人たちはギルドを利用している。たとえば、鉄を持ってきてほしいとか、金を掘ってほしい。モンスターの一部が利用したいなど。採取から討伐、ひどいものでは暗殺というのものもあるが、それは闇ギルドというのが主流なので一般の人たちには関係ないものばかりだ。だが、今回の任務ではそれを確実に逸脱している。やばい線かもしくは大規模な討伐か。

「国からの依頼か？ここはメラル帝国だからあんまりこういうのではないはずなのだが…。」

「実はそうだ。大規模なモンスターが出現したらしい。先遣隊が全滅したらしい。」

「全滅？編成はどうなっていた？」

「騎士が200人。2大国には劣るかもしれないが、それでもこれはただ事ではない。今回は討伐ではなく…。」

「調査ということか…。」

早い話が200人では全く歯が立たないので、調査である程度調べてもらって改めて軍を派遣するということなのだろう。ようは今回、死人が出る可能性が高いということになる。先遣隊のことを考えると30人では全く足りない。しかし、調査というのがネック。調査という形ではこれ以上の人数を集めることはできないだろう。おそらくテイラーが最年長だろうから、俺に誘いにきたということになる。彼には何度が助けてもらったこともあるし、いったほうがよいのだろうか。勘ではかなり危ない任務な気がする。

「分かった。行くよ。」

「そうか。頼むぞ。集合は1週間後だ。場所はガーネット鉱山だ。昼の一時に来るといい。」

「いや、あそこはもう調査済みだと思うが…。俺も…。」

「何か嫌な感じだが、受けてしまったものはしょうがない。どちら

にしても、調査いった後にもう一回、行くことになるから強制的に参加の対象にもなっていた。」

「万全の状態で行く。嫌な予感がする。」

「そうするといいい。俺も武器を新調して、もう慣らしてある。」

「そうかい。じゃあ、俺は行くよ。これからいろいろ買いたいものもあるし。」

「分かった。必ず来いよ。止めなくていいんだな？」

「ああ。受けるよ。じゃあな。手続きはよろしく。」

そうやって俺は外に出て行った。

メラル帝国では武器の質がいい。これは兵器を作るために新技術を試しているのに過ぎないが、その中にはかなり高度なものも含まれる。それは宝石を武器の中に調和させるということだ。これは簡単そうで難しい。材質によりうまくいかないかというのもあるし、何より武器全体に同じ純度にしなれないということだ。宝石自体はかなり沢山採れる。ダイヤモンドは少量が少ないが、他はだいたい同じだ。なんでこんなにもこの技術が重要かというとそれは術に関係してくる。術を術で使う場合であれば、変換するのは体内の術エネルギーだけでいい。しかし、これを武器や縦に付与させて使うとなると、先ほど述べたように材質との関係や武器の耐久度それらを考えたうえで術をさらに変換しなくてはならない。それには凄く集中力が必要で時間を使うため、よほどのことがない限り使うことはない。だからこそ、武器に宝石が仕込まれていれば、指輪や腕輪のように武器を媒体として術を付与することができる。この技術がこのメラル帝国にあると聞いてやってきたのだ。しかし、かなり難しいということだし、たくさん宝石を使う上に失敗もある。だから俺は金といい槍となるべく純度の高い宝石を集めて鍛冶

屋に行ったというわけだ。それが2週間前。他にもいろいろ任務は受けたが、まあ暇つぶしのが多かった。草むしりとか、家の解体作業を手伝ったり、木の伐採をしたり…。金はそこそこ溜まったが、槍ができなければ意味がない。さすがにもうできているだろうと思いい、鍛冶屋に向かった。

とは言っても俺の叔父がやっているのですごく行きにくいんだけどね。まあ、珍しいと言えば珍しい。三つの国にそれぞれの家族が住んでいるなんてね。

赤眼のレリク篇 第四話

ここら辺は都会からずいぶんと離れている。人見知りか激しい彼にとってはいいかもかもしれないが、ここを訪れる者は少ない。都会にも十分いい鍛冶屋がある。都会から100キロ以上はなれた所まで来るのは結構疲れるし、盗賊やモンスターを警戒しながら進まなければならぬので、そんなもの好きはそんなに多くないということだ。馬を買ったので2日ぐらいでつくが、徒歩だとかなり時間がかかる。ただ道が一本道なので迷うことは少ないだろう。

いかにも仙人がすみそうな不思議な家だ。今時木だけを使った木造の家は珍しい。術が使われるようになって家の構造もかなり変化した。重要な部分だけは石を使っている。災害に耐えられるようにとということらしい。構造はあまり詳しくないが、昔とは違いずいぶんと長い間住めるようになった。住居が安定するのはあの当時、感動されたに違いない。今では普通になってしまっているが…。

城などはちゃんと石で造られている。そこが要塞になるようにうまく構造を考えている。

今回はモンスターに出会わなかった。普通だったら、二・三回ぐらいいはあってもおかしい話ではない。

俺はいかにも古そうなドアを開けた。

「叔父さん、できたかい？」

「ああ、レリクお前か…。」

相変わらず凄く疲れた目をしている。いい武器を作るためにすごい

数の試作品をこしらえる人だからな。値段も高いが彼の武器には名作といわれるものが数多くある。親父とあまり違わないから結構年はずなんだが。うちの家系は元気なものが多いな。とはいっても残っているのはこの3人だけ。母は俺を産んで他界したし、祖母や祖父は戦争に巻き込まれてなくなった。叔父は結婚してないし…。できないか。こんな感じだったら。顔も悪くないし、スタイルもいいんだが仕事熱心すぎる。俺と親父と似て。

その割に部屋は散らかっていない。あくまで鍛冶場はだが。もしかしたら自分の部屋は汚れているのかもしれない。そうは言ってもこの鍛冶場は少しどころじゃなく十分に広いと言えるだろう。普通の家の2倍はある。叔父さんいわく、精製や宝石を砕いたり、武器に組み込んだりするのにはそれなりの広さが必要らしい。

「できたよ。よりによってエメラルドとは思わなかったよ。木の槍にしてやるうかと思ったところだ。」

宝石はだいたい色で術系統に分けられる。エメラルドは緑色が濃く出ているから木に適している。それぞれ武器には組み込みやすいものから難しいものまで、それぞれの材質にも特徴があるらしい。エメラルドはあまり使用されないため難しかったのかもしれない。でも、俺は他の系統が伸びると思えなかったので叔父さんに無理を言って作ってもらっていた。

「ありがとよ。早速試してみる。」

「ああ。でもここではやるなよ。後、術の合成がうまくいくかどうかは分からんぞ。未知の部分でもある。普通は1つの系統だけをここまで使うことはなかったからな。皆、バランスを重視することが多い。しかも、お前ほどの火となるとどうなるかは定かではない。」

ダンジョンに入るときに水系統の術は必須だ。俺は使えないから水筒の中に治癒薬を入れている。早い話が買うということだ。水はたくさんの人が使うことができるが、人を治癒するということになる。とできない人が多い。薬草の調合、薬草の効果、それを合わせる術のレベルと応用力。これらがすべて揃ったところでようやく治癒薬を作ることができる。バランスといっても水系統を使える人が多いのはこのためだ。しかし、自分を治癒する場合にはこれらはすべて必要ない。術エネルギーを自分にあてるだけで回復することができる。だからこそ、水系統の宝石はかなり値段が高い。例外としてね。

赤眼のレリク篇 第五話（前書き）

お気に入りに登録してくださった方ありがとうございます。
これからもがんばります。

赤眼のレリク篇 第五話

「任務を受けたそうだな。」

「うん。テディーが行くからな。彼にはお世話になったから。」

「いやな予感がする。お前の親父も心配していたぞ。無理していないかと。」

「余計なお世話だ。自分のことぐらい自分で守れる。」

「この任務が終わったら、親父さんのあいさつに行けよ。戦場では互いに敵だったかもしれないが、親子であることは皆知っている。そこまでとがめることはしないだろう。それに話したいことがあると言っていた。彼が冒険者のときの話だろうが。」

「親父が冒険者？そんな話は一度も聞いたことがない。」

「そりゃあ、奴から口止めされていたからな。お前が冒険者になると言つて家を出たとき、やっぱり俺の息子だと言つていたよ。まあ、お前がどう思うが関係ない。伝えたからな。行くなら行く。行かないなら手紙を出せ。分かったな？」

「分かったよ。この槍ありがとう。大事に使うよ。」

「ああ。気をつけて行ってこい。」

と言いながら、今受け取った槍を見ていた。いつもそうだ。そんなに本能的に動くようなタイプでもないけど、戦いになるとなぜか本能的に戦うことが多い。それが俺を助けてきたのだが、実はそれが問題で大きな事件になったこともある。

「レリク、それが新しい槍か？」

「ああ、きれいだろう。エメラルド色で。」

「目立ちすぎているような気がする。それに普通よりも短いな。」

今現在、練習している。場所は宿の隣の広場だ。だいたい宿には広場が近くにあることが多い。宿に泊まるものは冒険者か旅行者が多く、だからこの広場の使用料と一緒に徴収している。旅行者はそれをちゃんと引いている。この広場には的などはないので、自己鍛錬に使われることが多い。その広場で何とか火と木を組み合わせることができないと試行錯誤しているがうまくいっていない。どうも木の術が火の術に負けてしまう。系統の優劣があるから仕方ないが、それにしてもいろいろな術が開発されている。今回は武器に付与させようとさせているのだが、うまくいかない。

「そうか…。こうしてみよう。」

木を使うためには木を持っていなくてはならないということは全くない。奇妙かもしれないが手から葉っぱを出したりできる。だいたいは木を使うことはあまりない。家づくりには欠かせないが戦闘に使うことはあまりない。しかし、葉っぱなどはよく使う。葉っぱだつて角度によれば相手を傷つけることは十分に可能だし、枝の先をとがらせて雨のように降らせてしまえば弓矢のような効果を持たせることが可能だ。今回は…

「凄い術エネルギーだ。」

「これならうまくいきそうだな。」

「レリク。お前はやっぱり天才だな。葉を相手に纏わせて、火で焼くなんて…。かなり効果があるだろうな。だいたいの奴は水を使えるようにしているからある程度の火は防げるが、葉をくっつけてしまえば、高温で燃やしてしまえば水が爆発して危険になるから解除をしなくてはいけない。これで火の対抗策を減らすことができる。」

「しかし、このエネルギー量では今のところお前だけだ。」

「ありがとう。テイデー。ようやく1つはできた。」

「ここから系統の技を考えたほうがいいと思うぞ。」
「そうだな。俺自身ここを伸ばさないと水属性のモンスターには勝てないだろうからな。」
「じゃあ、そろそろ休みも終わりだから行くぞ。」
「分かった。」

赤眼のレリク篇 第六話

隊長というのも楽ではない。人材の配置、それぞれの把握、分隊長の指示、それに対しての連絡手段。考え出すときりがない。今回は31人でダンジョンに入ることになりそうだ。班は6班。1班・五人でそれぞれに分隊長がいることになる。俺は班に入っていない。俺が本気でやってしまうと周りに被害が出るからだ。俺自身初めて皆と入るのだから、全く分らないのだがテイデーの決定には逆らえないし、それに俺は緊急連絡係となった。一応、今回は特別に騎士が待機しているらしい。ギルドからの要請もあったのだろうが……。国としてもギルドとはいいい関係を保っていたいのは戦争のことがあるからだ。そしてモンスター討伐。俺は不測の事態に備えて騎士への連絡ということになった。それにいつも1人で入っている俺なら生き残る可能性が高いだろうということも上げられる。俺は黙々と練習をしていた。

ダンジョン前

「集合したな。今回は俺が言ったように6つの班に分けることになった。レリクは俺が言ったように緊急連絡係だ。他の人はこれから班を分けるからこっちに来てくれ。」

予想に反してずいぶんと名のあるやつが揃っている。「片腕」の口ス、「氷の女神」のラリア、「電撃」のルイ。他にも見たことあるやつが何人もいる。これだけ集めるのも大変だがそれ以上にテイデーの人望があつたからだろう。彼はいろんな人と任務をこなしていただくあつて信頼は厚い。班を分けるのも俺を緊急連絡係にした時も大した反対などもなかった。冒険者は例外なく荒くれ者が多い。

もちろん略奪や窃盗など犯罪じみたことをするわけではない。自己中心的な人が多いだけだ。その最たるものが俺だ。ギルドの言うこととはきかない、チームは組まない。はっきり言えば俺は異端児的な扱いを受けている。今ではいいほうに扱われているが。

「よし。全員班に分かれたみたいだな。今回の任務はあくまで調査だ。先遣隊「騎士200人」が死亡していると考えられている。少しでも異常なことがあった場合は必ず引き返し、少なくとも二つの班で対処すること、もしくはここにいる「炎帝」のレリクに連絡すること。班長は常に連絡を絶やさないように。できれば宝石などはとらないでもらいたい。万が一のことがあった時に対処できないことがあるかもしれない。注意事項は以上だ。何か質問は？」

「すまないが少し聞きたい。」

「なんだ。レリク？」

「先遣隊は本当に全滅しているのか？」

「すまないが、分かっていないんだ。先遣隊が出発してもう1週間になる。あのダンジョンに1週間もかかるとは考えにくい。推測にしか過ぎないが、全員がなくなっていると考えるのが普通だろう。だから今回はあえて言わなかった。皆知っていることだ。」

「生きていたらどうする？」

「生きていたら連絡してくれ。そして一旦ダンジョンを出てギルドに報告する。他に質問は？」

手を上げる者はいなかった。

「じゃあ、今から入る。皆、注意しろ。」

俺たちはダンジョンに入っていった。

「全員、班で固まって対処しろ。」
「これは何系統のモンスターだ？レリクさん見たことないか？」
ロスが言う。

何かよくわからないモンスターだ。なんとなくエイリアンの格好には違いないが、羽も生えているし、何より体が小さく手足も短い。あまり強い層には見えないが動きは素早そうだ。

「俺も見たことがない。一応土だと思って戦おう。」

皆、それに賛成したようだった。ダンジョン内のモンスターはダンジョン内の影響を受けやすい。しかし、羽が生えているというのは厄介だ。人間は空を飛ぶことができない。空中になると術や武器の命中率が極端に落ちる。

6匹のうち、1匹だけ体が大きな奴がいる。俺はそいつが動き出す前に始末することにした。少し強そうなので詠唱を行うことにした。詠唱を行うと術エネルギー変換効率が高まる。戦場で後続の術部隊が詠唱を行うのはこのためだ。

「我が火の神サラマンダーよ。レリクのエネルギーに答えたまえ。火の上級術マグマを使役することを許したまえ。」

もちろん、古語で詠唱をしている。

「マグファイア。」

俺はこの時モンスターは死んだものだと思っていた。

ボオオオオン

「やったか？」

「いや、まだだ…。」

「デディー。どうした？」

「1匹倒したが…。あれは無属性だ。しかもお前が攻撃する前に4匹は戻って守りに行った。」

「シャアアアア」

無属性。一見役に立ちそうにない属性だが、鍛えることによってすべての属性に対抗することができるものになる。人間ではなかなかそういったものはいないが、モンスターだと生まれつき使える奴も多にいる。そう言ったモンスターは上級種に分類される。

「妙ですね。」

「ラリアがそう言った。」

「ああ。おかしい。」

「デディーもそう言った。」

本来モンスターというものは群れで動くものもいるが、助け合うというようなことをしない。だからこそ、モンスターといわれているのだが…。この場合は…。

赤眼のレリク篇 第八話（前書き）

お気に入りにしてくれた方ありがとうございました。
これからもよろしく願います。

赤眼のレリク篇 第八話

「どこかに召喚師がいるということになるな。今では数も少なくなっていると聞いていたんだが、居る所にはいるもんだ。」

「お前も召喚師だろう。レリク。」

どうやら、奴らは一旦撤退することにしたようだ。煙が晴れたころには1匹の死体を残して消えていた。

「こちらも一旦、ギルドに戻ることにしよう。俺たちだけでは解決できる問題ではなくなつたようだ。」

そうして俺たちはダンジョンを後にした。

ギルド。そこは荒くれ者も多いが、その中には普通の人も交じっている。たとえば日雇いなどの人たちだ。引越し屋の手伝いや臨時店員とか：広い意味で今のハローワークに近いようなものである。だからいろいろな人が行き来している。小遣い稼ぎのためにきている騎士などもいる。どんな職業でもお金は必需品だ。最近では戦争なども起きていないので傭兵の稼ぎは少ないということが出来る。戦争なんてなくてもよいがないと困る輩もいるのは事実だ。腕っ節が強いために山賊が出ることも多くなってきた。普通の山賊とは違って商品や敵を確認して、また深追いなどは一切しないために捕まえるのは難しく騎士が出ることも多くなってきた。人間が平和を感じるときには必ず戦争がある。不思議なものだ。

所狭しと壁に張り紙がある。犯罪者のリスト、討伐対象のモンスター、求人案内、仕事のリスト、仕官への要綱などたくさん張り紙がある。バツをつけられている奴は終わったものだ。古いものでは10年前のものもある。そこには俺の幼馴染の名前がある。彼女は どうしてしまったのだろう。それでも彼女を連れ戻そうとして何回も失敗した。改心してもらいたいと願っていたが、2年前より懸賞金が上がっている。2ケタも上がっているということはかなりの悪事をやったのだろう。俺はそのリストをとった。

「レリクさん。彼女は止めたほうがいいですよ。」
ロスがいつも間にか隣に来ていた。

「どうしてだ？」
「召喚師になったそうですよ。彼女。」

召喚師とは異生物を召喚する能力を持った人のことを指す。異生物といっても普通のモンスターとはちよつと違う。違うところは召喚師の言いなりになることだ。完全に使役された存在であるために召喚師の支配下に置かれることになる。だいたいは倒したモンスターを従えることができるが、一定のレベル超えるとそうではないモンスターも召喚できるようになる。しかし、それは能力によって差がありモンスターのレベルも異なる。今回の召喚師は複数のモンスターを召喚しており、またモンスターのレベルも高いということが戦って分かった。しかも、かなりの練習をしているらしくモンスター同士の連携がかなりいい。俺が追っている彼女はそこらへんにいる奴らじゃ相手にならない。俺が戦った3年前は戦争があつた年だったが、彼女の犯行がかなり悪質で大量殺人それも殺されたのが騎士とあつて討伐隊が派遣された。その1人に俺は入っていた。

赤眼のレリク篇 第九話

「そうか…。」

「俺の親友は彼女に殺されました。当時は俺よりも強かった。彼と何回も任務を受けていましたが、召喚師としてだけでなく術そのものもかなりの腕でした。未だに彼が彼女に負けたとは思えません。」

「分かった。彼女には手を出さないよ。」

ロスには俺に対して忠告してくれたのだろう。今回の任務も危険が多いから俺が欠けると士気が上がらないとでも思ったのだろうか？どちらにしてもあいつは俺が止めて見せる。あの昔の約束をあいつが覚えているな。そうではない場合は…。

「どうしました？」

「いや、少し考え事していただけだ。」

ロスは少し不審な顔をしたが信じてくれたらしい。ロスの親友もあの討伐隊にいたのかもしれない。だとしたら可哀そうなことだが…。彼女は異端ともいえる能力を持っていた。

「ちょっといいか？レリク。」

「デーイーが俺に話しかけてきた。表情は硬い。あまりいい方向に話が進まないらしい。どうせ騎士のことだからかなり無茶な要求をしたのだろう。」

「今、あのダンジョンを爆破するという計画が進められている。」

俺はそれを聞いただけで嫌な予感がした。爆破するということはあ

の先には国として何か隠したいものがあるということだ。爆破するのには火薬がいる。この世界では火薬はかなり高価なものだ。それは小型にする技術がまだないからだ。どうしても大型になってしまふと個人ではそう簡単に買うことができない。それに個人で使うこともめつたにない。せいぜい戦争時に味方を巻き込んだの自爆か、今回のように炭坑やダンジョン、鉱山を封鎖するために使うことぐらいだ。炭鉱などはそのままにしてしまふとモンスターなどが生息してしまうこともあるし、子供たちが入ったりしてしまうのでこの世界ではとれない判断された地点で封鎖されることが多い。

今回はそう言ったわけではない。あのダンジョンはもうずっと前にとれなくなっている。しかし、初心者向けには分かりやすく単純なダンジョンだったためにずっと封鎖されずに未だに使われていたが、最近になって不幸な事件が続いたらしく今ではあまり使われていないということだった。

「嫌な予感がするな。国が関わっているとするとずいぶん黒い影が見えてくるな。」

「ああ。やばいな。傭兵たちは皆止めただろう?」

「言いたくはないがな。しょうがないことだ。命のほつが大事だからな。あいつらは国に忠誠を誓っていないのだから当然のことだ。」

「俺も降りる。国に関わるのはもうやめた。」

「すまないが、それは無理だ。」

「何?」

「俺たちには作戦をつきそつてもらいたいということだ。」

「付き添う?爆破するのに?」

「ああ。どうして分からないが。」

もしかしたら…。そう思つてならなかった。彼女が持っていた能力の中で優れていたのは探知の能力だ。探知というのは能力的には存在しないが、風と木、そして土それらを駆使することによって人や

動物の行動を感知する。俺はそれを嫌と思うほどメンドクサイ能力だった。体制を立て直そうにも引くことすらできないのだ。ペースを握られたら一方的に終わってしまう。俺はそれで一度危うかったこともある。今となってはそれも防げるようにはなった。ただしそれもマラリスのおかげともいえる。国の考えていることはよくわかる。あわよくば俺も一緒に殺すつもりだろう。

「様子を見ながら考えてみるよ。一緒には行くが1人で行動させてもらう。」

「分かったよ。上に掛け合ってみる。」

「デディーは何1つ気づいてはいない。」

上の連中が何を考えて“あれ”を作ったのか。俺は壊す義務があるし彼女を止める責任がある。この時のためにすべて賭けていた。

赤眼のレリク篇 第十話

「これから爆弾を設置してもらおう。細心の注意を払って扱うように。さもないと自分が吹き飛ぶことになるぞ。テディーは爆弾を運ぶ際にモンスターの襲撃から守る際の指示を出してもらおう。レリクは個人行動してもらおう。味方に被害は出したくないからな。では準備を開始してくれ。出来次第爆弾を設置しろ。レリクはこっちに来い。少し話がある。」

皆は準備に動いている。

少し離れたところにテントが設置されている。当然だがここは指揮官のテントだ。指揮官はいろいろと気を使うこともあるし、秘密の事項を決行することもある。例外もある。そう言う指揮官はだいたい上には上がっていけない。いつも上がっていくのはひと癖あるような男だけだ。

さて、どんな話だろうな。

「そこに座れ。レリク。」

俺の前にいる指揮官は親父の友達らしい。それぐらいしか知らないが一緒に修羅場をいくつもくぐってきたのだろう。俺なんか足元にも及ばないような舌戦を使ってくるだろうが、俺に対して使っても意味がないのかもしれない。ほとんど隠し事はしない主義だから。しかし、彼女との戦いは秘密にできたし能力についても秘密にしている。それは彼女から仕掛けるようなことがあまりないからだ。探っていくと意外とその人たちが悪かったりする。どこの国も上の連中はこういうことをしているのはいつものことだ。

「お前に聞きたいことがある。」

「なんです？」

「ダーク・デビルがここにあるとみている。一般的にはそうは呼ばれていないそうだし伝説になりつつあるが、今出てしまうと少し不味い状況になる。この一つの“人工”マリリスのために戦争を起こすわけにはいかない。それに今となってはその技術も分からない。それを知った上で彼女を追っているのだろう。お前には期待をしている。今この国には彼女に対抗できるような奴はいない。彼女を止めてほしい。しかし、それだけでは不十分なのだ。彼女を確実に死刑へと追い込む材料がほしい。お前は望んでいないかもしれないが、あのマリリスは覚せい剤と同じだ。たとえ手放したとしてもその存在を感じることができるようになり、それを使おうとする。人を殺してでもな。」

「……………」

「要するにだ。上の失態を隠すためにもダーク・デビルを手に入れて、彼女を生け捕りにしてほしい。もちろん無理な場合は殺してくれ。これ以上彼女が野放しにされるのは好ましい状況ではない。責任は俺がとろう。君に不幸の根本的なものであるのは我々が行った研究や実験によるものであるのは確かだ。」

「生け捕りにしたら終わりますか？」

「何？」

「生け捕りにしたらダーク・デビルが他の人を魅了しないという保証があるのかと聞いている。」

「それは…神のみぞ知ることだ。お前は我々の言うことを聞いてくれさえすればいい。」

「神のみぞ知るだと？作りだしたのはお前たちだろうが。しかも、彼女に持たせたのもお前たちだ。お前たちが壊せなくてあれをどうやって壊すんだ。」

「違う。上の人たちはそんなことは望んでいない。あくまであれを

正常な状態に戻すことができる。そう言っているんだ。あれが完成したとしたらどれだけ有効なことになるか分からないのか。今、後遺症などで苦しんでいる人たちがもしかしたら治るかもしれない。人々を襲う山賊からも守ることができる。モンスターにも対抗することができる。有益なことが多いのだ。ここまで私たちは止めるわけがない。君にこの考えを賛同してもらおうとしているわけではない。ただ協力してもらいたい。それだけだ。テディーも強いが彼では到底及ばないほど彼女は力をつけてきた。召喚師としても一流だ。君しかないのだ。協力してくれるね。しなければこちらもしかるべき対応をせざるを得ない。君の親父さんとは友達だし、できれば荒事は避けたい。」

「協力はしない。俺のやりたいようにやらせてもらう。彼女にかなうものがないのなら、俺にもかなうものがないということだ。俺のことはだれも止められないよな。」

「落ち着いてくれ。レリク、ダーク・デビルだけを回収してくれればいいんだ。彼女は別に関係ない。こちらの便宜で計らうこともできる。」

「でも、前みたいに襲撃をするのだろう。弱った人間を殺す手際はかなり上手だよな。」

「ご、誤解だ。レリク。あれは手違いだった。そう言っている。上の人だって……」

「だから下の人は死んでもいいんだな。」

「そうは言っていない。」

「じゃあな。」

赤眼のレリク篇 第十一話

俺は少し川辺に座っていた。小さいときは本当に水が好きだった。自分が不得意だからなのかもしれないが、あこがれも持っていた。多くの人を助けた。親父の背中を見てるとそう思った。親父は人殺しだ。俺は昔も今もそう思っている。俺自身も。戦争だから英雄として活躍していた。残忍ともいえるあの強さは俺を心底悩ませた。そこまで守るものとは一体何なのか分からなかったからだ。俺はあの日を境にして親父とは違った人殺しになった。もちろんそう言った任務は避けるようにしている。しかし、名前が売れるにしたがって俺の周りにはそういつて連中がうるつくようになった。あわよくば俺を殺して名を上げようというもの。俺を利用しようとするもの。俺は世界で有数の傭兵になったことで待っていたものは孤独だった。ここまでやってきたのも彼女のおかげなのかもしれない。今の俺を支えているものは皆が持っているような“生きたい”とかそういう感情ではなくて、彼女を殺しても止めなければならぬという使命感だ。今日こそは彼女を捕まえる。もうすぐそこなのだ。俺はあれ以来強くなった。どんな時も人に屈せず、人に従わず、孤高に生きてきた。彼女を捕まえれば答えが出るのだ。

「行くぞ。警戒を怠るな。」

誰も気づいていない。ダンジョンが明るいとということはないのに。松明を持たなくても明るいということは何かの術なのだろうが、俺は初めてみた。見てみると俺のマリスも化がいて見える。ダーク・デビル。あれがすべての宝石に影響力を与えているのだろう。俺は今この段階で“彼ら”の支配下であるダンジョンに入ったことが分かった。フィールドに影響力を与えることは理論上では可能である。

しかし、莫大な術エネルギーが必要であることは言うまでもない。こんな使い方をする奴はいないだろう。あれからまた新たな力を持つたらしい。

俺は1人で行動していた。分かれ道がある以上、それに合わせて人数を割かなくてはいけない。俺も言われたとおりに爆弾を仕掛けている。爆弾というのは設置してしまえばそれで爆発するわけではない。一番近くの爆弾を爆発させて連動的に爆発させるという手法をとっている。だからこそ、正確に置く必要がある。

「どこにいる？何を一体考えている。」
いつもならもつと早く出てきてもいいはずだ。早くしないとここが爆発するはずだ。

“爆発”？もしかしてこれを逆に利用するわけか。早くしないと手遅れになる。

「テディー、聞こえるか？」

緊急連絡用だったが、彼の電波は途切れていた。俺は来た道に戻った。

「なんだよ。これ…。」

そこにあつたのは死体の山だった。すべて心臓を一突きされている。それだけレベルの違いがあるということだ。テディーはともかく普通の騎士では対応できないだろう。あくまで騎士なのだ。正統派が何でもあるような卑怯な戦法にはかなうはずがない。それが証明されているのが彼らの剣に刃こぼれしないことがその証明になっている。大方、1人人質に取られて降伏したのだろう。そこから待機

していたモンスターに襲われれば一瞬で方がつく。しかし、俺はこ
ういうやり方があまり好きではない。騎士の人たちには悪いが、勝
つためには手段を選ばないのは傭兵としては普通のことだ。死んで
しまつては元も子もない。馬鹿にしたやり方が気に食わないのだ。
今回の作戦ではこの人たちは殺さなくても死んだらう。他の奴だ
つてそうだ。俺は大丈夫かもしれないが…。それよりもテディーは
どこに行った？あいつならそれなりに対処できたはずだ。ここまで
殲滅させられたということはないだろう。俺はテディーが行った真
中の道を走っていった。

赤眼のレリク篇 第十二話

「ハアハア……」

「もう終わり？もう少し楽しめるとおもったのになあ。」

異常だ。こいつの強さは……。俺はレリクから彼女の強さを聞いて知っているつもりだった。剣も通じない。術は圧倒的に劣っている。初めは攻撃をしていたが、彼女が反撃してからは防戦一方だ。

「ふん……。何か隠しているかと思ったんだけど……。ここじゃ使えないみたいだね。フィールドの影響かもしれないけど……。彼を呼びだすにはもう十分だから、あなたはもう用済み。死んでね。」

ぞつとする笑顔だ。俺はここではやられるわけにはいけない。そう奮い立たせた。そして自分にある術をかけた。自分の迫りくる剣が遅く感じる。俺はそれを難なくよけた。

「あれ？今ので死んだと思ったのに……。あなた変わった術使うのね。雷属性……」

俺は本能の赴くままに彼女に剣を突き出す。突きは払いと違ってあたりにくい、ガードしにくいというのも特徴の一つだ。彼女は反応しきれていない。俺は確実に彼女の腕をとるつもりだった。しかし、俺自身が止まってしまったようだ。

「苦しそうだね。ふふ。」
体が動かない。

「簡単なことよ。あなた自分の脳に電気送ることで体の能力を活性

化させていたのよね。」

あのわずかな間で見抜いたのか…。

「私の周りに少し電波を流してあげたの。そうしたらあなたは体がしびれて動けなくなってしまうというわけ。電気も微量ならいいかもしれないけど大量に流れたら体に毒だよ。自分で自分を苦しめるなんてかわいそうに。かなり正確な術コントロールが要求されるだけに使う相手には考えて使わないと。忠告してももう遅いか。動けないみたいだし。今度こそ死ね。」

俺もどうやらここまでらしい。最後にここまで強い奴と会うと生きる気力もなくなる。運が悪かったのだと思ってしまう。レリク、お前なら勝てるかもしれない。あのときよりもずいぶん強くなった。後は任せた。

俺は彼女の剣が自分の首を飛ばそうとしているのをゆっくりと見ていた。

ガキイイイイン

「よお。久しぶりだな。」

「レリク、久しぶり。カツコ良くなったじゃない。ずいぶん強くなつたみたい。」

「余裕だな。アクア。俺にはもう勝てないよ。そろそろ投降したらどうだ。」

「ふふ。自尊心だけはつよくなつたみたいだね。2年前のこと忘れた？あのときは天と地が離れているぐらいかけ離れていたのに。よくそんなことが言えるね。」

キイイイン

「話はそこまでだ。お前が投降しないなら最後までやりあうまでだ。今回は必ず捕まえる。」

「うん…。頑張ってるね。フィールドを変えて、私とやりあうつもりなんだ。そのマリリスが君に力を与えているみたい。まるで私を持っているダーク・デビルと同じ。マリリスって…。危ないなあ。話を聞いてよ。」

「テディー、立てるか？」

「ああ。」

「今すぐここから離れる。騎士は全員死んだ。お前だけでダンジョンを出す。」

「分かった。風よ。」

テディーの風の術は空気の流れを掴むためのものばかりだ。彼はダンジョン内での索敵の担当だ。彼が一番得意にするのはモンスター
の把握と数の調査、そして的確な道を見つけだすことだ。彼ならば
3分もあればここから出るだろう。

「何か…むかつくなあ。彼を逃がそうとしているのは見え見え。私
がそれをさせると思っわけ？」

「さてな。お前も召喚の使い過ぎで術はあまり使えないだろう？そ
れに爆弾を少し湿らしているからな。今日ばかりは俺のほうが有利
だ。」

「葉霰」

「水柱」

ほぼ同時に術を出し合う。

葉は水には強くはない。葉が水にぬれてしまったら葉自体が重くな

つてしまい、術として機能しなくなる。だから木の術は枝かもしくは組み合わせで使えることが多い。しかし、俺は自分の術が着実に完成に近付いていることが分かった。

あれから2分間俺は木の術を使い続けていた。馬鹿の1つ覚えかもしれないが、それでも手を出し続けているため、アクアは防戦だ。

「葉嵐」

「水流」

「もうきかないってば。確かに完成度は高いけど私が得意なのは水と氷だよ。相性が悪すぎ。そこら一面に葉だけだよ。気持ち悪いなあ。もう。」

「そうだな。それにしても熱いだろ。この中。」

「それは仕方ないわね。フィールドが…」

「気づいたようだな。この水の量と葉の量があり、俺の火の術を持つてすれば、ここは木端微塵だ。」

「あなた死ぬ気？」

「まさか…。俺の後ろをしてみる。」

「不死鳥。そう言うことね。」

赤眼のレリク篇 第十三話

俺はダンジョンの外に出ていた。レリクの言ったとおりあそこには邪魔だった。俺が守られることだけは避けたいから俺を逃がしてくれたのだろう。強敵相手に人を守りながら戦うことは不可能に近い。しかし、もう俺がダンジョンを出て2分が経とうとしていた。いくらなんでも長すぎる。一対一の戦いというのは普通2分ぐらいで片がつく。術と武器が使われるようになって、ますます速くなつた。緊張でかなりの体力を使う。それが原因だ。特に術を使う場合はオリジナルが多く防ぐのはかなり困難だ。レリクや彼女みたいなのは正直言つて例外なのだ。だいたい1つの系統を操るので限界の者が多い中、あいつらはそれをはるかに超えている。化けものだ。

ズドオン

始まったようだ。これからダンジョンが崩れるだろう。俺は爆発が終わるまでそこで待機していた。

爆発が落ち着いたので見てみるとそこは瓦礫の山だった。今までのような鉱山の形はしていない。俺はレリクを探すために歩きまわつた。あいつがあそこに残るくらいだからきつと何か対策があるのだろう。そう思っていると先に2人の姿があつた。その瞬間、そこで爆発が起こつた。

「クソッ。まさかそう言う対処をしてくるとは思わなかった。」

「こっちもそう簡単にはやられてやるわけにはいけないのよ。」

俺は不死鳥をあらかじめ召喚しておき、俺と同化させてダメージを肩代わりしてもらうことにしていた。不死鳥は死んでも復活するので大丈夫だが、復活には術エネルギーが必要で、しかも長い詠唱が必要となる。術エネルギー量が多い俺でも一回が限界だ。

アクアは自分の周りに巨大な竜巻を発生させて、その中に大量の水を混ぜて自分自身を守った。熱風が引いてくる方向と反対に穴をあけてそつちに飛ぶように自分で仕向けたのだ。後は自分が着地する時に水と葉を混ぜたものを着地点にばらまく。それでうまく受け身をとったようだ。

「お互いダメージが深いわね。ちゃんと騎士を殺しておいて正解だった。あなたは本当に強くなった。」

「まだデディーがいるぞ。」

「ふふつ。彼は体を動かすので精いっぱいよ。それは分かっているはず。」

「くそ。俺もまだ戦える。不死鳥行くぞ。」

「そうもいかないんだな。これが…。」

彼女の後ろに巨大な鳥が出現した。

「破壊神バハムート…。」

「対をなす鳥。やってみたら面白いけど、今の状態ではどうかしら？」

コオオオオ

不味い。何かを出すつもりだ。土で防御を…。

ズドオオン。

「ハアハア……。くそ。逃げられた。」

これが彼女との二回目の戦いだった。

赤眼のレリク篇 第十四話

俺は休んでいた。不死鳥の能力で様々な攻撃を無効にできるとはいっても限界があるのは唯一の欠点だ。完全に不死鳥と同化してしまうと人間性が失われ、不死鳥になってしまう。それを防ぐため、人間としての感覚と、体の一部を残さなくてはならない。俺の場合は失った右目と痛覚を残している。右目はもう失っている。これ以上失うこともないだろうし、治療をしなくてもいいのが楽だから。痛覚を残しているのは攻撃を受けたということを感じるようになるようにするためだ。安心してしまつと限界にも気がつかずに死ぬことなんてざらにあることだ。いつまでも命の危険を感じることで人間性を保つるにも役に立つ。そうはいつても体は酷使されているため、十分な休息が必要だ。しかも、かなりの術エネルギーを使つてしまった。回復までには1週間から10日はかかる。それまではここで休むつもりだ。幸いにも任務は成功したので、十分な額が支払われた。騎士があんなに死んだのは想定がいたと思つていようと思つては思つていたが、俺のところには騎士が誰も来ないということはそういう事実態も考えられたということだ。しかも、あいつは消えた。一応死体はある程度確認しているから俺に分かる。彼が何を考えているかは分からないが、事の顛末はあいつが報告したのだろう。それよりも彼女の行方が気になる。破壊神バハムート。あれは俺が召喚した不死鳥と対をなす召喚獣だ。本来召喚獣というのは、存在しないものだが、まれに召喚師はこの生き物を召喚することができるスキルを持つ奴がいる。それは創造が豊かとかそういう問題ではなく自身のこころの性質によって分かれる。俺はたまたま不死鳥だったし、彼女はバハムートだった。偶然かもしれないが、運命を感じられずにはいられない。彼女は絶対に俺が倒す。

「どうしたの？怖い顔しちゃって。」

「何でもないよ。ナルミ。」

そう俺はナルミの家で厄介になっている。彼女はアクアの姉に当たる。義理だが。彼女は役所に勤務していて、アクアとは正反対だ。真面目で慎重な性格だ。俺がここに来るのは何かアクアに対するすべが見つかるのではないかと思っっているからだ。2人とともにここで育つたのだから。

「傷はどう？」

「ああ。だいぶ良くなったようだ。助かった。」

「まだ、アクアのこと追っているの？」

「ああ。俺にはそれしかないから。」

「お願いもうやめて。あなたが行くような必要はないでしょ。」

「あいつは俺の幼馴染だ。俺が行くのは普通だ。」

「嘘ばかり。そんなことで追っているわけではないでしょう？ いてもあなたは自分に嘘をついてばかり。少しは素直になったらどうなの？」

「お前に何が分かる？」

「分かるわけじゃないでしょう？」

「じゃあ、黙ってる。」

「あなたに私の気持ちが分かるの？ 犯罪者として生きてきたものとずっと長い間過ごしていたのよ。差別だって当たり前だったし、働くところ探すのもずいぶん苦労したのよ。アクアのことを個人的に探している時もあつたわ。それでも私の気持ちは変わらなかった。周りの反応も変わらなかった。でも、努力して努力してようやくこの生活に溶け込めるようになってきた。あなたはずっと1人ではなかったのに、1人の道を歩んでしまった。くしくもそれはアクアとの決別と戦いの日々だったわね。そばに居ながら、2人も救えない私の気持ちを考えてよ。彼女は病気を持っていること知っているはずよ。遠からずアクアは死ぬことになる。どんな力を持っていたにし

ても病気に勝つことはできない。だから、あなたにはもう普通の生活を送ってほしい。もう十分に稼いでいるじゃない。これなら一生生活していけるし、2人でも何とかなるわ。初めは少し慣れないかもしれないけど…。」

「ナルミ。俺はもう決めたんだ。彼女を連れ戻すと。そして彼女が持っているダーク・デビルを壊すことにしたんだ。」

「だから…それを…止めてって…言ってるの。今の様子だと、相打ちになることも十分にある。もうあなたしかいないのよ。私には…。」

「すまない…。」

「ううん…。気にしないで。少し疲れていただけだから。」

「…少し外を歩いてくるよ。」

「ええ…、気をつけてね。行ってらっしゃい。」

赤眼のレリク篇 第十五話

関係を持ったのは俺が片目を失った時だった。たまたま通りかかった彼女に救われた形になった。少し年が離れていたため、お互いそんなに話したことはなかったが何回も顔を合わせたことはある。そうはいつても、お互いにあつた時には知らなかった。当然だ。彼女に最後にあつたのは10年以上前だ。風貌も変わってしまったているから分かるはずもない。療養も兼ねて俺は狩りによく出ていた。彼女の収入は決して低くないが、それでも貴族みたいに肉を毎日、買って食べるような余裕はない。居候という形だし、料理や洗濯もあり上手にできないために食料ぐらひは自分で賄おうと思っただけだった。一方で不思議にも思っていた。休みの日には全くと言っていいほど出かけないし、定時には必ず帰ってくる。どちらかという和内向的かもしれないが、彼女はきれいだし、言葉も訛ってはいない。問題があるとすればそれ以外の何かではないかと思っていた。しかしながら、そんなことを聞いたところで意味もないし、いずれはここを出ていく。そう思つて俺はあえて聞かないことにした。ただ、少しあとに事件が起きた。いつも定時に帰ってくるはずの彼女がその日は帰つてこなかった。俺に対して遠慮があつたのかと思つて少し待っていたが、それでも帰つてこなかった。彼女のことだから何か用事があるなら俺に一言言つていただろうことぐらひは分かる。暴漢か強盗か何かに襲われているのではないかと思い、彼女を探しに出かけた。探していると路地裏に人が集まっているのが見える。ここら辺はあまり治安が良いほうとはいえないので自警団がいるはずなのだが、自警団はただ見ていただけだった。これは少しおかしいと思ひ、少しのぞいてみると彼女が公衆の面前で罵声を浴びせられていたのだ。声があまりに多数聞こえるのでうまく聞き取れなかつたのだが、殺人者の姉とか言われているらしい。俺は話についていけなかつたが、とりあえず彼女を助け出し、手をかけようと

した輩をボコボコにしてその場を強制的に終わらせた。そういった場はこういう風にやってしまうのが、一番楽だった。他のギャラリもあまりいいようには思ってたらなかったらしくボコボコにした彼らをどこかに連れて行った。家に帰って彼女に事情を聞いたが、彼女は全く話そうとしなかった。俺はそれもしようがないと思って、そつとしておくことにした。誰にも話したくない秘密があるのは普通のことだ。俺もアクアについてのことを話したことはない。親父にもだ。だから彼女にもそういった過去があるのだろうと決め付けた。その日、彼女がベッドに入ってきた。目が充血している。今までずつと泣いてきたのだろう。俺は彼女を抱きしめた。これで収まればそれでいい。俺ができる唯一の慰め方だった。そして彼女は俺の顔を見つめ、接吻をした…。

ある行為が終わり、彼女がポツリポツリと語りだした。それは俺とは違った人生を歩んだことだった。そして、アクアに対しての思いも語っていた。その時俺はようやく分かった。この人はナルミでアクアの姉であるということ。ここまで調べたのは彼女を止めようとしてのことだろう。しかし、彼女には力がなかった。勉強や理論は人一倍できた彼女だったが、残念ながら身体能力や術エネルギー量は劣っていた。彼女ができることは限られていた。彼女には俺からも話をした。彼女がどうなってしまったか、俺とどういう関係にあるのか、そして彼女が何をしているのか。俺が知っているすべてを話した。その時には彼女も俺のことをわかっていたようだ。村からアクアが去った2日後に行方をくらました俺のことを。村の皆は俺らのことを悪くは思っていないらしい。あのダーク・デビルを手にしてからアクアが豹変したことを知っていたからだ。俺がその日を境に変わったことも皆知っている。だからと言って許されるかと言えはそうではないのだが。残酷なことにもうその村はない。彼女の話によるとアクアが滅ぼしてしまったそうだ。

俺は外を歩いてきた。ここは2年前とあまり変わっていない。人の出入りが少ないこの村は多くの者が狩猟や耕作で暮らしている。自給自足だ。お金を手に入れる手段の多くは木彫りだ。この暮らしをしていると遊びがほとんどない。だから皆、木に囲まれているため木を彫るのが趣味になっている。読み書きなんてほとんどの者はできない。よく生活していると思うが、ここにいると時間が止まったような感覚に陥る。俺が住んでいた村に似ているからかもしれないが……。ここにいる暮らしももうすぐ終わるだろう。そう思って後ろを振り返った。

赤眼のレリク篇 第十六話

「ロスとか言ったな。お前……。ここまで付いてくるとは思わなかったよ。やるって言うなら相手になるぜ。これでもずいぶんと休んだからな。お前の相手ぐらいはできるつもりだ。」

「いえ、そういうわけではないのです。テディーさんにこの場所を教えてもらってきたのです。あなたに頼みというか教えてほしいことがあります……。」

「なんだ？」

「アクアのこと……。そう殺気立たないでください。」

俺は知らず知らずのうちに槍を強く握ってしまっていた。

「いや、すまない。頼みは聞けそうにない。彼女は俺がやるって決めている。」

「彼女が現れたそうですね。」

「……。」

「あなた方の過去に何があったのかは分かりません。しかし、彼女は僕の親友の仇でもあります。自分ひとりで敵うとは思っていません。だからこそ、あなたと共に彼女を止めたいのです。」

「止めたい？「殺したい」の間違いだろう？」

「初めはそう思いました。しかし、しかるべき所で彼女の所業を暴露し、公的に罰することがいいかと思っています。彼女にやられたのは僕の親友だけではありません。他の方も多くなっています。僕だけの問題ではないのです。あと……。」

「あと？」

「あなたは彼女を救うと人伝に聞きました。こういつてはなんですが、彼女に寛大な措置をしようとしているのですか？」

「そんなつもりはないが……。」

「それを見張りたいと思います。彼女は捕まえられるような人間ではないのかもしれませんが。だからこそ、皆のために殺すことも念頭に置いておかなくてはいけません。僕はあなたと一緒に同行させてもらいます。」

「そうかい。勝つてしなと言いたいところだが…。あいにく俺は1人で行動するのが好きなんだ。それはよくわかってるだろう?」

「では、どうすればいいですが?」

「分かっているだろう?かかってこい。」

ガキイイイン

「簡単に勝てると思わないでくださいよ」

「望むところだ。」

それから数刻後：

バシヤアアア

「はっ。ここは?」

「さっきの場所だよ。」

まあ、俺には勝てなかったな。当然だと言ったら当然かもしれない。

「まさか剣だけで負けてしまうとは思わなかった。」

「しょうがないな。年季が違うからな。まあ、後ろを守るぐらいには役に立ちそうだな。」

「えっ。」

「明日にはここを立つ。準備しとけ。」

「はい。」

俺はその場を後にした。

赤眼のレリク篇 第十七話(前書き)

すみません。

かなり短いです。

赤眼のレリク篇 第十七話

「明日には出ていく。」

「そう…。」

「すまないな。」

「うん。いいの…。必ず帰ってきてね。待つてるから。」

「ああ。じゃあ、俺は寝るよ。」

「待つて。今日ぐらいいいでしょ…。」

そういつて彼女は唇をつけてきた…。

「世話になった。」

「うん。行ってらっしゃい。」

俺はゆっくり歩いてきた。いつもとは違う。そんな感じがしたからだ。何とか自然が近くに感じられるというか、命の息吹を感じるとでもいうのだろうか。そんなに大きくないこの村も昔に比べて寂れてきた。若者は少なくなっただし、ここで住んでいるものは出稼ぎに出ているものも最近では多くないらしい。それでも週一回は皆帰ってくる。生活はほとんど変わってはいない。ただ働くところが変わったただけだ。不良も最近はいないみたいだし治安もよくなっている。老後に住むにはいい村になった。

「遅いですよ。レリクさん。」

「ああ。悪いな。少しのびのびと歩いていた。」

「まあ、気持ち分かりますけどね。」

「何か情報はあるのか？」

「はい。」

アクアはこの国にとどまっているらしい。傷が深いという情報があるとか。それは確実に嘘だと否定してやったが。所詮はエネルギー・体力切れだ。休めばある程度回復する。怪我なんかよりずっと楽なはずだ。気を引き締めてはいたが、なにも手掛かりがないというのはあまりうれしいことではない。

赤眼のレリク篇 第十八話

「こつも手掛かりがないと困りますね。」

「いつものことだ。適当に任務でも受けるか。」

ここはメラル。この国の首都だ。ここ以上に情報が集まる場所はない。俺のスタイルはいつも情報が集まるまで、その国の首都にいて何らかの情報が入ったらそこに出向くというのが普通だ。昔は情報屋に頼んでいたが、なぜか消されることが多くこのほうが意外と情報がよく集まるのだ。目撃証言は今回は多い。早く集まるだろうと思っていたのだが、なかなか集まりが悪い。

「何の任務を受けます?」

「雑務だ。」

「マジですか?」

「ああ。大マジだ。」

雑務は冒険者が嫌がる仕事だ。無駄に体力を使う。たとえば、剣を作るから火を消さないようにしてほしいとか、引越しを手伝ってほしいとか、いやがらせをしてほしいとか…。とにかく冒険者が思っているハラハラ感というか緊張感がないのだ。それを求める奴らは死ぬことが多いのだがな。

「これなんかどうですか?」

「何だ?」

「試食です。」

「それは止めたほうがいい。死ぬぞ。」

一回受けたことがある。試作がうまくいけばいいがうまくいかない

場合は地獄が待っている。首都ではごみにも税金をかけている。なので食べてもらったほうがいいということだ。しかし、受けたこっちはたまったもんじゃない。初めのうちはいいが、どんどん追加されていく。それがコース料理だったりすると考えなくても分かるだろう。内容が書いてないやつは特にやばい。

「そうだったのですか。じゃあ、止めておきます。」

「もっと普通なのはないか？」

「これなんかどうですか？庭の草抜き。報酬は…一カルト…昼食付き。」

「破格で安いな。舐めてるのか？」

万国共通硬貨のカルトで取引はされる。普通の家庭での収入は一カ月で10000カルトぐらいだ。この任務は安すぎる。まあ、恩は売ることができるだろうな。そうきつくなさそうだし。もうそろそろ男二人での食事にも飽きたところだ。

「それにしたらどうだ。楽し。」

「そうですね。受理表をもらってきます。」

雑務は終わった時にサインがいる。討伐などとは違って確認の仕方がないからだ。ギルドは先払いでお金をもらっているからいいかもしれないが、任務を受けているほうはそうはいかない。もらえるのともらえないのでは全く違う。しかも、任務を失敗したという形になるためあまりよいことではない。ギルドは見えて見ぬふりをするが…。雑務を引き受けている人が少ないからだが…。

「レリクさん。きついです。」

「泣き言言つな。まだ半分も終わってないぞ。」

これだから雑務はやる人が少ないのではないかと思った。考えてみたらここは球戯場だった。行ってみれば、庭とはいえないぐらいの芝が広がっている。これは術を使ってできることではない。雑草を伸ばすという簡易的な術があるが、他の雑草まで無駄に増やしてしまう。きりがないことになる。しかし、レリクさんは一切不平を言わず、雑草を取っていた。この人の頭はおかしいと思うことも多々あるが、この姿を見てみると尊敬する。どんな仕事にも一生懸命に皆そう言っているが実践している人は少ない。

「お二人さん、昼時だ。飯を作ったから食べよう。」

「ああ。分かった。行くぞ。ロス。」

「はい…。」

昼飯は焼き飯と野菜、そして焼肉だ。さすがに金額が安いだけあって料理もそう手の込んだ料理ではない。しかし、量がたくさんある。これならこの金額でも納得というものだ。ここでの仕事を受けたのはそれだけではない。ロスはよく見ればよかったと言っていたが…。俺は知っていたからそんなに対して堪えはしなかった。

赤眼のレリク篇 第十九話

「少し聞きたいことがあるのだが…。」

「んっ、何だ？」

「最近ここは使われてないみたいだな。何かあったのか？」

「ああ…。最近の情勢は知っているだろう？」

「聞いた。」

クトルとイクトが少しくずぶっているらしいということを知った。いつも戦争した国だ。公約が切れればまた戦争が始まるだろうことは誰が見ても明らかだった。しかし、まだあの大战から2年しか経っていない。どう考えても戦争の傷跡が大きく、これから十年の間、戦争は起きないのではないかと思っていた。あくまで戦争だ。少しの衝突ぐらいはあるのはしょうがない。いつも憎み合っていたのだ。歴史というのは人類の過去の栄光や発展の経過を示したものだが、遺恨も残してしまう。それが戦争というものだ。

各国には大きな会場や闘技場、球戯場がある。それは時には友好の証として大会などが開かれるためだ。一時期みたいな本格的な戦争やくすぶっているときなどは使われないことが多い。各国のトップたちが集まるため襲撃やテロなどが起こってしまうからだ。戦争が起こっていたとしても大会が開催されたこともある。球技や闘技などと戦争は別の話だ。あのときは各国の傭兵が集められお互いに牽制し合っただけらしい。有名な話だ。

「その中でも怪しい情報が流れていてな…。」

「それは…。」

「ここだけの話だ。メラル・ガジスが同盟を結んだらしい。」

「本当か？」

「疑惑の枠を超えないのだが、確かに思い当たる節もある。先週、トップが顔合わせをしたという噂が流れていてな。普通はこういう話題は消されることが多いのだが、いや、この国ではだが。」

「分かっている。続けてくれ。」

「同盟の内容はこうらしい。1つ目はお互いに侵略行為をしないこと。二つ目はお互いの国が第三国に侵略または攻撃されたときに援護・救援を送ること。三つ目はお互いの国が第三国に侵略または攻撃をしたときに傍観すること。もし、その国が他の国と同盟を結ぶ等の行為に出た場合、お互いを助け合うこと。これぐらいだな。」

「えらく詳しい情報だな。」

「だから疑惑の枠を出ないんだ。」

本来噂というのは個人的な見解がある場合多く、不確定的な内容ともいふべき情報がついて回る。それは単純に言えば、拡大解釈だ。

たとえば、婚約間近のイケメンが1人と付き合っているのに大人数と付き合っていると言われるなどだ。今回の噂は詳しすぎるし、同盟という内容にも違いない。だからこそ“誰か”が故意に流して戦争を起こそうとしている。そう考えるのが自然だろう。国とも考えるから“個人”が流したかどうかは分からないところだが…。

「そう言うことか。分かった。」

「内密にはしなくてもいい。関係者ならだれでも知っていることだ。」

反対に考えれば、皆が信じ始めているということだ。誰でも知っていることはそれが周知の事実だと言っているようなものだ。あとは国がどうするということにかかっているが…。

「レリクさん。食べないのですか？すごくおいしいですよ。」

こいつ…は全くもって緊張感がない。確かに緊張するところでもないかもしれないが少しは緊張しているような顔をしてほしいものだから、こいつは一流になりきれていないのだろう。性格もあるかもしれないが…。どちらにしてもこれから慎重に情報を集める必要がある。情報が集まるやつには同じように情報を提供する奴が近くにいるその情報を誰が求めていたのかまでが情報になる。俺が聞いていることも情報になるのかもしれない。俺も有名人になってしまったからな。前の任務で俺の噂はかなりに広まった。

「俺が言うのもなんだが…、この連れは大丈夫なのか？」

「ああ。働くときには働くだろ？」

「まあ、そう言われればそうかもしれないな。」

「こいつも死ぬのような事態になれば死ぬ気で働くさ。」

「うーん…。そんな性格には見えないのだが…。そう言うことにおおごう。今日は遅くまでやらなくてもいい。明日もやってもらおうことにするからな。さすがに2人じゃ難しいだろ？」

「そう言ってもらえると助かる。何せ、芝が少し深いもので探すのが一苦労なんだ。」

「悪いな。切ってしまったからでは遅いからな。夜は少ししか出せないが賄いも出すから食っていけ。」

「分かった。」

「もう少ししたらまた頼むぞ。」

上がしつかりしていると働くのも楽だ。部下が何をしているのかもしつかりと見ているのだろう。破格でギルドの任務を頼むのも信頼があるからこそギルドも受けるのだ。何回も任務受領者とけんかしているような依頼人はこんな金額では頼むことなどできない。それは俺が雑務系の任務を受け出してから気づいたことだ。

「ロス。食べ過ぎるな…。もう言っても駄目か。」

みるとかなりの量を食べていた。傭兵だから仕方ないのかもしれない。それにしても食いすぎだろうと思ったが、自公自徳だ。次からは学習する。俺は食事をやめにして椅子に座って休んでいた。

赤眼のレリク篇 第二十話(前書き)

少し短いです。

赤眼のレリク篇 第二十話

「レリクさん。きついです。」

「あんなに食べるからだ。雑務とはいえ立派な任務だ。任務である以上手抜きでやれるほど甘くない。それを肝に銘じておけ。」

「はい…。すみません。」

「どうせ、吐きそうなんだろう？休んでおけ。」

「どうして分かったのですか？」

「俺も同じことをしたことがあるからだ。これでお前も二度とやらないだろう。」

「そうですが…、言っていただけとありがたいのですが…。」

「俺は保護者ではないぞ。自分のことぐらい自分でやれ。」

傭兵は弱肉強食の世界だ。確かに自然の摂理とは少し違うかもしれないが、評判というものが命になることが多い。特に大きな仕事が入ってくる時には名が売れたものの方に依頼が行くことが多い。それだけ値も張るが、その分いい仕事をする。ギルドもそういう傭兵や冒険者は大事にするので下手な任務は受けさせない。下手な任務とは要するに胡散臭いものとか殺しみたいな裏が絡んでいるものだ。1人で知るのには限界があるため、ギルドの情報は貴重だ。ギルドは確実なものしか信用しない。

「さっき聞いた話だが…。」

「ええ。僕も聞きました。こればかりは信用できるものかどうか怪しいですね。」

「ああ。そうだな。慎重にやるしかない。」

「しかし、彼女が絡んでいるかもしれないが、こんな回りくどいことをやるでしょうか？僕が思うに彼女は外交的で好戦的な性格だと推測できます。情報は違う筋だと考えられると思います。」

「俺もそう思うが…。もし彼女を援助しているような奴がいるとしたら厄介だと思わないか？」

「彼女に仲間ですか？それも考えられなくはないですが…。ありえないような話だとも思います。仮に前の戦いでレリクさんを倒すのには仲間が必要だと考えたとしても、彼女の仲間になりそうな有能な人間はそうそういるはずありません。ましてや彼女は犯罪者です。それも指名手配中ですから、そんなに簡単に仲間ができるとは到底思えません。」

俺もこいつの意見に賛成だ。アクアは強すぎるからか1人で行動している。これは調べているから明らかなことだ。2年前の姿の現わし方といい、このようなことをやるやつではない。もし、仮定を立てるとすれば、それは国の思惑が絡んでいると考えるのが普通だろう。あえて彼女はそれを伝えているのかもしれない。第3勢力が絡んできていると…。そう考えるとあまりいい感じはしない。あくまでアクアと俺の勝負なのだ。邪魔はされたくない。

「どちらにしても調べなくてはいけませんね。」

「ああ。この仕事が終わったら手分けをして調べよう。そのほうがいいかもしれない。ロス、お前はそこそこ強いから大丈夫かもしれないが、いつ誰が見張っているか分からない。気をつけておけ。」

「分かっています。私もそれなりに経験がありますから、そこら辺は大丈夫です。しかし、面倒なことになりそうですね。」

「ああ。」

本当にそうだと思いながら、雑草を摘んでいた。

赤眼のレリク篇 第二十一話(前書き)

すみません。

短いです…。

赤眼のレリク篇 第二十一話

あれから1週間が経った。いい情報も入らなかった。こういうのは時間が解決することが多い。情報がなくても情報を集めることが重要なのだ。いずれ情報屋のような人たちが売ってくるだろう情報。それが頼みの綱になってくる。いい情報は高いのだ。

ということでは俺は今日も雑務の仕事を受けていた。もちろん昼つきの比較的体力仕事だ。ロスは解体工事のほうを手伝っている。解体仕事は術に頼ることが多く、比較的受けやすい任務だ。まあ、あいつはハンマーで解体をするタイプだろうが…。顔に似合わず…。俺が言えないか…。

「頑張ってるね。」

「そうかい？」

「こういった“解体”作業はやる人が少ないからね。皆嫌がるんだ。」

「まあ、誰かがやらないといけませんから…。」

俺も解体作業を行っている。しかし、牛の肉の解体作業だが…。これも結構ハードだ。次から次へと牛が回ってくる。それだけ多くの人たちがここに住んでいるということだ。単純作業だし体力は使いが、賄いはいおしく、そして給料もいい。今回は昼飯と夕食がついて一日1000カルト。破格に高い。しかし、ほとんど休憩はない。

「よお、休憩だ。ほらよ。牛乳だ。」

新鮮なものばかりだ。ここはそれが売りだからな。俺は牛乳を一気に飲み干した。

「相変わらず豪快だね。ここにきて2日目か。よく頑張っているよ。」

「ありがとう。」

「それで情報は集まったのか？」

「全く。皆無。」

「そうか。こればかりは手伝えないからな……。」

夕食がてら、いろんな客と話をしている。ここは夜、居酒屋として
いる。もちろん解体場は別の場所にある。居酒屋というのはいろ
んな情報が集まりやすい。ギルドの情報はなかなか変わらない。その
分信用できる情報が多いが、もうそれでは足りなくなっている。何
でもかんでも集めてもいい情報や彼女の情報さえも集められないの
だ。あんなに堂々と逃げて行ったのに……。

「まあ、気長に待つしかないな。」

「ああ。」

「さて、行くか。お前はもう少し休んでいていいぞ。」

そう言って彼は居酒屋になるだろう部屋を出て行った。

赤眼のレリク篇 第二十二話

「どうでした？」

「俺のほうは全然だ。」

「僕のほうは少しだけ気になる情報が…。」

「どんな情報だ？」

「彼女が逃げたとレリクさんが言った方向に女が2人通ったそうです。」

「女が二人か…。」

「ええ、なんとなく怪しい情報ですが…。」

しかし、このような情報が入っているだけで十分だと思った。これ以上の情報ももしかしたらあるかもしれないが、手に入れたところにはもう違うところにいるだろう。経験上ここからが潮時だ。ナルミの家で1週間休んで、ここで1週間働いた。移動時間も考えようとすぐ3週間。これ以上同じところにとどまっているとは思えない。それでも行つて情報を集められるかもしれない。ここからは一週間はかかるかもしれないが…。

「行きますか？」

「ああ、いくよ。」

「そうですね。明日には行きますか？」

「いや、少し準備してから行こう。明後日に出発する。それまでは自由行動だ。」

「分かりました。」

ロスが出て行ったあと、俺はこれからどうするか考えていた。

ここは首都メラルから2日ほど歩いたところだ。野宿をしているが今回はいつもよりも楽だった。1人見張ればよいので眠る時間が多く取れる。1人だとどうしても浅い眠りになってしまい、疲れてしまふ。1週間もすれば疲労が溜まってしまい、どこかで休まなくてはならない。

「まさか旧首都のウルゲイにいるとは…。」
「何かあるのかもしれないな。不吉なところとも言われているし。しかし、まあ、今は何も無いようだし安心はできると思うが…。」

旧首都のウルゲイは不吉な街として知られている。3代前の皇帝が即位した折には大規模な飢饉に見舞われ、餓死者が続出した。それが収まった3年後には近くにあるウルゲイ山が大噴火をおこし、街の4分の1がマグマによって壊された。もちろん火山灰の影響もあって次の年には飢饉が起こってしまった。その4年後には皇帝が病によってなくなり、次の皇帝が即位したときには反乱がおきてしまった。首都がたびたび壊れてしまったために、国民に重税をかけたるを得なくなってしまったのだ。その反乱が収まった2年後には伝染病が大流行し、10万人の人が命を落とした。これだけのことがあったので皇帝は遷都を宣言し、今のメラルに遷都した。それ以後全く不吉なことは起きなかつたため、ウルゲイは呪われているとか不幸の町、皇帝の住めない首都などと言われている。

「そうですね。もう100年も前の話ですし、尾びれがついていてもおかしくないです。」

「ああ。すべてが本当ではないだろう。こんなことがあつたら、国として雲行きが怪しくなる。ある程度、運も必要だな。」

ある程度の年月が経つと飢饉や伝染病など流行、災害というのは起

こつてくるものだ。それが続けて起こるか、一定期間を開けて起こるかで国民の印象は随分違う。なんとなくその時になったら備えをし始める。しかし、何回も立て続けに起こってしまうと準備どころかその場しのぎで精いっぱいになる。

「レリクさんはウルゲイに行ったことはありませんか？」

「聞くのが遅い気もするが…、行ったことはないよ。近くまでは行ったことはあるが…。」

「近くに何かあるのですか？」

「いや、叔父が鍛冶をしているからそこに行ったただけだ。」

「そうなのですか。その槍を作った方ですか？」

「ああ。そうだ。今回は彼のところには行かない。全く関係ないことでもないからな。帰って心配かけるのはよくないだろう。」

「しかし、何か情報を持っているかもしれないよ？」

「彼のもとに来る人は少ない。知っていることも少ないだろう。俺の噂も知っているかどうか分からないぞ。」

「まるで仙人みたいな生活をしているんですね。」

「そういう人だからな。起こらせると怖いぞ。お前はなよなよしているから会わないほうがいいだろう。」

「そんなにはつきり言わないでくださいよ。落ち込みます。」

「見たそのままを言ったただけだ。戦うと違うのだからいいだろう？」

「まあ、いいです。」

そんなこんなで俺たちは1週間、歩いてウルゲイへ向かった。

赤眼のレリク篇 第二十三話(前書き)

すみません。

区切り上、短いのが続くかもです。

赤眼のレリク篇 第二十三話

俺が思っていたような感じの町ではなかった。活気にあふれているように見える。困難を乗り越えたからか彼らには普通の違った雰囲気を感じてしまう。俺はこの感じが大好きだ。目にあふれるほど元気なさま。目に籠った不屈の心。俺はそれを手にするために多くのものを失った。この人たちも昔の経験を生かしているだけだが、それがどんなに重要か分かっている。家の造りも地震、マグマや火山灰にも備えられるように何らかの術か何かで補強をしている。生きるための知恵が満載だ。ぜひ他の国民も真似してもらいたいものだ。

「活気がある街ですね。」

「ああ。いい街だ。」

「さて、ここからは個人行動にしますか？」

「いや、ここには知り合いがいないだろう。そう考えれば2人が一緒にいたほうがいい。あの情報が本当かどうかわからないから闇討ちなんてことがあつたら、1人では対応しづらい。とりあえず、1週間は様子を見よう。」

「そうですね。焦る必要はないのかもしれませんが。ここら辺は治安が悪いことで有名ですし……。」

「治安が悪い？この街がか？」

「ええ。傭兵の話では有名な話ですよ。ここにいるときは腹をくぐれと言ってきた先輩さえいましたから。それがどうかしたのですか？」

「お前気がつかないのか？」

ここには全くと言っていいほど殺気が感じられない。治安が悪い所にはたいてい殺気があつたりするものだ。たとえば、余所者が来た

ときはどんな奴が尾行するとか等、やることはうまくやらないと足がついてしまう。ここに住居を構えているなら、だいたいは傭兵や冒険者から盗む。取られても文句が言えないような悪いことをした奴もいるのだ。仮に俺たちがここで有名であったとしても、ある程度のことをするはずだ。もしかしたらここにアクアはいたのかもしれない。

「アクアがいそうですか？」

「いたかもしれないな。あいつは目立ちたくないときは犯罪者を狙って金を巻き上げたりしていた。それに裏のリストに載っているような悪い奴を殺したりして金を稼いでいる。ここはきれいに浄化されているように見える。この街にいた可能性は高い。」

「しかし、いくら犯罪者を捕まえたからと言ってお金を払いますか？」

「裏ギルドの奴らが倒せないような奴を倒すんだ。もし、拒否したらどうなるかなんてお前も想像つくだろう？」

「まあ、そうですね。」

「だが、気は抜くな。いつでも剣を抜けるようにしておけ。」

「はい。」

こういった時の顔は凄く強そうな傭兵に見えるのだけだな。俺はそう思ってしまった。

赤眼のレリク篇 第二十三話（後書き）

お気に入り登録して下さった方
ありがとうございます。

赤眼のレリク篇 第二十四話(前書き)

すみません。

短いです。

赤眼のレリク篇 第二十四話

あれから10日経った。俺たちは今、ダンジョンに潜っている。ダンジョンの任務を受けることしたためだ。それは3日前に遡る。

「ダンジョンの任務を受けることにする。」

「えっ？何ですか、いきなり。」

「もう情報収集は限界だろう。確かにたくさん無法者が捕らえられたが裏ギルドは黙ったままで口を開こうとしない。普通は開かないが今回ばかりは口を割るだろうと思っていたが、そうはいかないらしい。とすれば考えられることは一つだけだ。」

「アクアはこの近くにいる可能性が高い。そういうことですね。」

「そうだ。どこかに潜伏しているはずだ。今回は仲間がいるという情報がある。これが結局のところ分からなかったのはあまりいい状況ではない。しかし、彼女がいるかもしれないところを2人が一緒に探すのはかなり時間がかかってしまう。ある程度まで潜ってみて可能性があるところに行くことにしよう。」

「最後は曖昧ですね。」

「しょうがない。分からないのだから。」

「話はだいたい聞いています。彼女は攻撃してくると思いますか？もし、仮に私たちがアクアのいるダンジョンに入ったとしたら？」

「俺が思うにはだが、何らかのアクションは取ってくるはずだ。あいつは正々堂々勝負する気質だ。本来は……。前のように国などが絡んでくると厄介なことになる。しかし、今回はここウルゲイだ。国の支配の及びにくいこの場所ならそのような事態はないだろう。そう考えてもいいと思う。」

「私は反対です。もしものことを考えて2人で行くことを勧めます。それに潜っている間に新しい情報が入るかもしれません。それに分

かかれて行ってしまつてはここまで一緒に来た意味がありません。それに俺一人では彼女には確実に勝てませんし、逃げることですら難しいでしょう。もし、こちらの情報が漏れていたとするなら、後手に回ってしまいます。」

ロスの言うことは正しい。そうすべきだろう。俺はやはり彼女を一人で拘束しなかった。しかし、彼女の能力を考えるとそれができない。俺一人ではアクアは…。

「考えていることは分かっていきますよ。しかし、状況と能力を考えていただきたい。彼女はあれからますます強くなった。我々が力を合わせなくてどうするのです?」

俺は決断を迫られた。

赤眼のレリク篇 第二十五話(前書き)

すみません。

短いです。

赤眼のレリク篇 第二十五話

「行くぞ。」

「はい。」

それにしてもあれから楽になった。それはダンジョンが明るくなったことだ。モンスターも目視できる点ではかなりよくなった。無駄な心配をしなくてよいのは本当に楽だ。

「しかし、何でしょう。今までとは何か違う感じがしませんか？」

「ああ。もしかしたら、もしかするかもしれない。」

「ギルドは気づいているでしょうか？」

「もう気づいているだろう。難易度はかなり上がったな。」

あの時からだろう。何らかの影響で入るたびにダンジョンが変わっている。しかも、そのグループ以外の者は違うルートをとどるようになっていく。くまなく探せば、鉢合わせということもあるかもしれないが同じ時期にそして同じ時間に入るとは少ない。だから、ダンジョンの難易度が変化しているのだ。救出することができなくなった今、致死率が格段に上がってしまった。これから入念な装備と仲間の存在は必要不可欠だろう。

「ギルドもここからは慎重にならざるを得ませんね。」

「ああ。それよりもすぐに動けるかどうかわからないな。もう少ししたら一時的に任務を止めるだろう。その時、裏ギルドがどうなるかを見てないといけないうな。」

「ええ。正規の依頼ができないときには裏が横行しますからね。十

分に注意が必要ですね。」

「反対に考えれば、その分裏ギルドの値も上がる。そうすれば、ア
クアも食いついてくるだろう。いつまで自分の能力を鍛えるだけじ
や食っていけないからな。」

「…。」

「どうした？」

「いえ、何か大きく世界が動いているなと思ひまして…。」

「そうか…。お前もそう感じたか。」

「まるで、3年前の時みたいに。」

「ああ。そうだな。戦争が始まって、国が大きく動いてしまったか
らな。」

「今回は…。」

「そうだ。俺たちの番だ。それに伴って国も大きく動く。稼ぎ時だ
な。」

「僕らにとつては。」

「いい狩り時だ。」

俺たちは脚を進めた。

赤眼のレリク篇 第二十六話(前書き)

すみません。

短いです。

赤眼のレリク篇 第二十六話

探索し始めて1時間が経った。今回は遺跡なので足場が悪いことはない。しっかりしている分、罠があることも多い。特に多いのはア
ンデット系のモンスターだ。特に突然変異型の幽霊は非常に厄介だ。
あくまで、術が苦手な奴らだということになるが…。

「レリクさん、手伝ってはくれないのですか？」

「ああ。頑張れ。」

術は応用の仕方で威力が変わってくる。またその分攻撃種類も豊富
で多彩な技が期待できる。しかし、剣のみのパターンや剣に術を付
与して戦うのが得意な奴らはひたすらに修業をするしかない。この
状況では確実にロスは足手まといになる。術を防げないだろうこと
が分かっている分、俺がそれを援護し、ロスが剣で術を集中させな
いようにして、体力勝負をかける。これがおそらく一番いい形だろ
う。だが、あいつは俺にも勝てないほどに弱い。このままじゃ、ア
クアに殺されてしまうことは明確だ。ということであいつのレベル
を図っている。

俺が教えることはもうないだろう。彼のレベルまで行くとあとは自
分で技を磨く以外に方法はない。切り方や防ぎ方、力の入れ方、フ
エイント。これらの使い方がもっとうまく使えればあいつは今より
ももっと強くなるだろう。俺はそう確信していた。あとは俺の術を
あいつにかけることでの身体能力を上げることであいつには対抗で
きるはずだ。

「手伝ってください。」

「分かったよ。」

アンデットは光に弱い。こんなのは常識中の常識。

「ライト」

「ありがとうございます。」

厳密に言えば、普通の光では全く意味がないのだ。術の光のじゃないと効果がない。その証拠にアンデットは光がないと動かないのだから。しかも、アンデットは食事をしない。どうやって動いているのかはわからないが……。光がなくては動かなかったのだが……。こういった状況になったのでアンデットが平気で動くようになってしまった。畏が分かりやすくなったのはいいことかもしれないが、これもアンデットが動きまわると結構メンドクサイ。

「終わったな。」

「ええ。どうでしたか？」

「まだまだだ。できればあれぐらいは楽に倒せるようになりたい。」

「そうですね。頑張ります。」

赤眼のレリク篇 第二十七話(前書き)

短いです。

赤眼のレリク篇 第二十七話

結局、そのダンジョンには何もなかった。そんな気はしていたけど少し落ち込む。1つのダンジョンに丸一日はかかってしまう。それが無駄だったと思うと何だかやるせない。

「レリクさん、埒が明きませんよ。これじゃあ…。」
「分かってるよ。これからどうしようかと考えているところだ。」

この旧首都ウルゲイは長い間、国の中心と言っただけあって、遺跡や建造物が多く、ダンジョンも多いのだ。今、見ているのはそのダンジョンがすべて書かれているリストだ。ざっと見る限り100はある。早い話が100日はかかるということを知っているのと同じだ。

「弱ったな。こんなにダンジョンがあるとは思わなかった。しかも、ギルドの奴だから、まだ隠されているようなダンジョンもあるだろうな。」

ギルドは確かに仕事を斡旋するのが主な仕事だが、危険すぎるダンジョンを探索させないのも仕事の一つだ。危険な所にはよい宝が眠っていることが多いが、その分危険を伴う。よっぽどの緊急事態でない限り、危険度が高い所にはあまり行かせないようにしている。ただでさえ、傭兵や冒険者は好き勝手に国を超えたり、または戻ってきたりするので、数が安定しないのだ。特に冒険者はその傾向が強い。反対に傭兵は一時的に仕事で滞在するようになることが多い。違う国で戦争がはじまったりするとそちらに流れてしまう。傭兵は冒険者と違って死ぬことが多いのも数が安定しない理由だ。

「ギルドは教えてくれないでしょうね。」

「そうだな。俺があんなことやってしまったからな。あまり詳しいことも聞けないだろうし、教えてもくれないだろう。裏ギルドに頼むか、地道に見つけるか……。」

「少し聞いた話があるのですが？」

「何だ？」

「この自治を任されているものから聞けばいいと思います。」

「正論だが、教えてはくれないだろうし、会うこともできないだろう?。」

「しかし、試してみる価値はありませんか?裏ギルドみたいに殺してみたいなことを頼まれたりすることは少ないでしょうし、両方とも通じているのはウルゲイのトップですから。」

「まあ、そうしてみるか。やるだけやってみよう。それから考えても悪くはない。」

ということであれは予約をしてみることにしたのだった。

赤眼のレリク篇 第二十八話

「あの…。」

「俺に聞くな。」

ただいま、拘束されております。

ギルドに聞かれたらそう報告するだろう。なぜかわからないが、ちゃんと会う約束をして武器も携帯せずに行ったのだが、拘束されてしまった。

ギルドからの情報でもこんなことは一切なかったように思う。初めて会うにはあまりに失礼だ。いかに俺たちが傭兵だと言っても武器を携帯していないのであれば、ボディガードをつけるぐらいにするのが妥当の線だろう。しかも、俺たちの噂はここにもちゃんと流れていた。有名なだから足がつきやすい。そう考えてもこれはやりすぎだ。

反対に、もしかしたらと思うことはある。警戒心が強いということ。ここにアクアみたいな荒くれ者が来たということも考えられる。悪いほうに考えるとこれから襲撃されるといふことにもなるが…。

この家はそんなに広くない。どちらかというと庶民的では裕福だが、首都の貴族みたいに豪華だとは思わない。飾りものは少ない。壁や床も決して高いものではない。むしろ安いぐらいだ。それでもここが高い理由は立地がいいということだけだ。役所や商店、鍛冶屋などいろんなものが集まっている。本当にここにトップが住んでいるという家なのか心配になってきた。

「おい、立て。」

「いつになったら解放してくれるのかな？そろそろ手首が痛い。」

「そういうわけにはいかん。話が終わるまでこのままでいてもらう。」

「メンドクサイ。」

「レリクさん……。言いすぎです。」

「お前。」

「ここまでするぐらいなら、断われよ。こっちたいしても失礼だぞ。」

「しょ、しょうがないだろ。状況が少し悪いのだから。」

「状況が悪い？何の話だ？」

「それはウルゲイ様が話してくださるはずだ。お前たちは聞いていればよい。」

何か釈然としない。どういう状況にしろ、あまり好きではない。

俺たちは立たされて、長い廊下を歩いていた。初めは小さな家かと思っただがそうでもないらしい。長屋だな。

「ここがウルゲイ様の部屋だ。くれぐれも失礼のないように。」

「今の段階が失礼の気がするが……。」

「そんなこと言ってたら首が飛ぶぞ。」

「はい。すみません。早くいきましよう。レリクさん。」

「ああ。」

少し重たそうな扉が開かれた。

「久しぶりだな。レリク。」

「ああ。今はウルゲイと名乗っていたのか。道理で馴染みがないわ

「けだ。」

その椅子に座っていたのは親父の友達の男だった。

「今の状況を説明してもらおうか？」

「ああ。いいだろう。」

「その前に…」

「何だ？」

「僕はあなたたちの関係を知らないのですが、説明してもらっても？」

俺はこの前の出来事を説明した。

「分かりました。ありがとうございます。」

「さて、アクアを逃したみたいだな。」

「ああ。油断していたのは事実だ。彼女はもう止まらないだろうかな。」

「まあ、いい。今の状況を説明しよう。簡単にいえば、私は命を狙われている。どうやら私があゝの鉱山の爆破計画を立てたことがばれたらしい。とはいってもあくまでも提案したのは全く別人なのだが…。彼女は今、この首都にはいない。それは確かだ。しかし、私はここ何日か襲撃されている。この人間ではないとは思っているが、それは今も調査中だ。とらえたものの尋問を行おうにも彼らは強い。周りを固めていたのはメラルでも指折りの騎士だったのだが。」

「彼らは何か言葉を発していたか？」

「いや、そんなことは言っていなかったと思うが…。特性が解放された可能性がある。」

「特性？」

「何ですか？それは？」

「マラリスの特性だよ。」

「あの状態でも解放されていなかったということか？」

「あくまで推論だがな。しかし、今まで彼女に変わった特徴はなかった。そうお前みたいに特徴があることはなかった。確かに術エネルギー量は半端なく大きかったが…。」

「あれはあいつ自身のエネルギー量だ。」

「そうらしいな。全く。困ったものだ。」

「それでその特性は何だ？」

「その前にその襲撃した者たちの話をする。」

「捕まえられなかったのでは？さっきそう言いましたが…。」

「襲撃のときは捕まえることができなかった。しかし、彼らが倒れているのが見つかった。」

「それで？」

「記憶がないらしい。」

「記憶が…。」

「記憶喪失ではない。ここに来るまでと俺を襲ったことやここでの生活を覚えていなかった。」

「ということは…。」

「彼女の能力は人を一定期間操ることができる。」

本来そうだった術は存在する。しかし、その場合は自分の意識がそのかけた人の意識を支配することによって操ることができる。しかし、この術は雷系統の術でかなりの技術、集中力、また、操る人の抵抗力もないといけない。もしなかったら、死にいたる。脳の中が解けてしまうらしい。そのためこの術は使われることはない。それに加えて操る側の人間が気絶していないと意味がない。意識がないほうが支配しやすいためだ。昔は尋問に使われたらしい。しかし、凶悪犯や死刑囚などに限ってだが…。

赤眼のレリク篇 第二十九話

「厄介だな。」

「ああ。特定もできないし、何より無実の人たちが敵になるのは国家としてはあまりよろしくない。今のところ圧力をかけているから事実がばれていないが、もし、ばれたときにはかなりの騒ぎになる。上は今回の事件を重く見ている。お前たちのことも評価しているつもりだ。本来ならこのウルゲイには入れなかったところを特別に許可している。」

「おまえ、あの爆破を俺とテディーになすりつけたな。」

「まさか、テディーにはなすりつけるわけないだろう。お前だけだ。あれほどのことをできるのはお前ぐらいしかいない。とはいっても表向きだ。知っている奴は知っているはずだ。そもそも犯罪者がそう簡単にギルドに出入りできるわけがないだろう?」

「それはそうなのだが。」

犯罪者。そう扱われる者はだいたい賞金首になることが多い。騎士が逮捕できるものはすぐに逮捕される。逮捕できないようなものが犯罪者として認定され、すぐに賞金首となる。そういったものたちはギルドには立ち寄ることができない。すぐに逮捕されるし、追われることになるのは目に見えている。だから、それを認可している裏ギルドが暗躍することになる。汚い仕事でもやらなくては食っていけないのはしょうがない。だいたいはそうして破滅していくものが多い。邪魔になったものは裏ギルドが殺す手はずとなっている。しかしながら、例外も多く、裏ギルドでも逃すような奴らはいる。

そうした人たちは一級の賞金首となる。犯罪者にはそれぞれ賞金のレベルがあり、一級ともなると30年ぐらいは遊んで暮らせるよう

な大金が手に入る。それを目当てにして討伐隊が組まれたりすることも多くないが、ほとんど全滅して帰ってくる。

一時期、賞金首の奴らが同盟を組んでいたこともある。それがアクアの討伐の時だ。あいつは2年前、力を試すためかたくさん賞金首の奴らをとらえていた。犯罪者は群れることがあまりできないし、人間不信に陥っていることが多い。裏切りにあつて、しかも命を狙われているのだ。そうなるのも無理はない。それが当然だろう。

「しかし、こちらとしてもこれ以上野放しにはできない。今のところ未定だが、大規模の討伐隊が組まれることになるだろう。その時になったらお前たちにも召集がかかることになる。その時までアクアを追っておけ。これから言う情報は信憑性に欠けるが、そういう情報でも構わないなら教えてやる。」

「教えてくれ。」

「この国にはいないという情報といるという情報を得ている。いるほうの話からしよう。2人で行動している。それは事実らしい。ただ、その1人は傭兵の可能性が高い。前に話したことを考えるに、その傭兵は操られている可能性が高い。完全なる従者として、操られているようだ。この近くに本拠を構えているとみられている。あいつらがいるダンジョンは断末の谷。そこにいるらしい。あそこは本来、人が通れるような場所ではない。モンスターのレベルが高いのが大きな特徴だが、ドラゴンが叫ぶ声が聞こえることとその泣き声の人が死ぬときに叫ぶときの声とよく似ているためにその名前が名づけられた。それ以来、そこに行ったものはいない。唯一行ったのは、この国の初代国王らしい。何やらあいさつに行ったとか…。一体誰にあいさつに行ったのか。未だに不明だ。」

「そんなところにいるというのは考えにくい。」

「どうしてだ？アクアの実力なら行くことも可能だろう？」

「仮に行けたとしても戦いばかりだ。そんなところに行って何の得もない。特にアクアにとっても…。何かがあるとすれば別だがな。」

「何か？何です？」

「さあな。俺にはよくわからんが。しかし、マラリスはあるだろう。それは間違いない。それを狙いに行ったのかももしれない。あそこは人がいないところなのは確かだ。いたという文献もない。それを調べたいが、犠牲が計りしれん。俺たちは別の仕事でも忙しい。」

「別の仕事？ああ。」

「噂というのは面倒だから。そう簡単に消えないのも分かっている。戦争は消費ばかりだからな。早く消すに限る。もしかしたら、それを見越しての噂かもしれないがな。ともかく、お前たちには別段何を求めるといっわけではない。しかし、目立つような行動は避けてくれよ。何か情報が入ったら伝える。じゃあ、これで話は終わりだ。」

「待ってください。もう1つの情報は…。」

「おい、余計なことを聞くな。それに察してやれ。」

「えっ？」

「すまん。」

「まあ、いいってことだ。情報頼むぞ。」

そう言っただけで俺たちは重い空気を纏った部屋を出て行った。

赤眼のレリク篇 第三十話

「レリクさん。どうしてですか？」

「ここは数日まえに借りた宿だ。すぐに出ていくことになるだろうが…。」

「分かってやれ。国を股にかけているということだ。」

「他の国に行ったかもしれないと？」

「そうだ。それだけならいいがな。そうではないから最後まで話せないということだ。」

「しかし…。」

「準備をして向かうぞ。」

「断末の谷にですか？」

「ああ。行くぞ。しらみつぶしに行かないともう方法はない。少しの情報を信じるほかない。」

実際そうなのだ。この近くにいてるものでさえ彼女のことを知らない。この国で起きていることを知っているし、鉾山が爆破されているのも知っているのに彼女を見てないし、空には何も映らなかったみたいなのだ。あそこまででかい鳥が通ったら普通は気づくはず。アクアは少し違うような気がする。もしかしたらここに来ていなかったのかもかもしれないと俺は思っている。だからこそ、ウルゲイは後者の情報を俺たちに与えなかった。しかし、あの断末の谷に誰かがいるのは確かなのだ。そこに居る人が奴を狙い、何かを企んでいる、それを阻止してくれということだ。その人がもしかしたら彼女との何らかのつながりを持っているのかもしれない。あくまで推測にすぎないが、それが一番論理的で、状況を見た形であると俺は思った。

「従いますよ。しかし、彼女がいる可能性は低いつてことには変わりないと思いますよ。それでも行くのですか？」

「相手に貸しを作るのも悪くないだろ？今後の展開を考えたら。」
「……………」

「そうですね。他国に行くなら、なおさらいいのかもしれない。」
「だろ？断末の谷に行くまでかなりかかる。帰ってくる頃には終わっているだろ。」

ここから歩いても2週間はかかる。そういう道のりだ。そこまで行くのにかかなりの数が命を落としている。テディーも途中までしか行くことができなかつたらしい。かなりの道程だ。それにしても、ここに住むというのはどうなのだろうか？バハムートとか出たりしてな。まさか、そんなことはないか。

「何か、嫌な予感がしますね。」

「そうか？俺は楽しみだな。」

「そうですね。あなたは変わっていますね。怖くないのですか？」
「怖いかな…。あいつに刃を向けられた時には本当に怖かった。死ぬかもしれないではなく、裏切られたことが怖かった。だが、今はもう何ともなくなつた。」

「なぜ？」

「人を信用しなければいい話だからな。」

「肝に銘じときます。」

「いい心がけだ。お休み。」

俺たちは次の日に出発した。荷物はいつもと同じ。槍と水。そして

少しの食糧だ。火が使えるからたいいの寒さぐらいなら平気だ。そもそも俺自身は温かいが、ロスはそうはいかない。普通の人間だ。普通は寒くなるのが普通だ。このマリスは本当に特別だと思っっている。ロスは剣と食糧だ。ロスは水を使うことができる。極めているわけではないが、それでも自分が水を持つていくようなことはない。水は必要になるから、そういった意味でも仲間がいいのかもしれない。裏切られなかったらの話だが…。

「レリクさん、今日はどこまで行きます？道がだいぶ入り組んでいます。迷うこともあるかもしれませんが。」

「迷っているような気もするがな。」

そうここは森なのだ。断末の谷に行くためにはまず、このメンフィスの森を抜けなくてはいけない。名前の理由はメンフィスっていう昔の英雄がここで命を落としたことに由来するらしい。もう少しマシな名前を考えると思ったが。わざわざ不幸な名前にしなくても…。

「どうでしょうか？今のところ、方位磁石が指している方向で間違いないのですが…。」

「森を出るまでそれを信じて進んでみるしかないな。出ることができなかつたときに少し考えよう。」

「そうですね。特に強そうなモンスターがいるような気配もありませんし、緊張もすることもないかもしれないです。」

「ここまでは誰でも来ることができからな。さて、今日の泊まれそうなところを探しながら前に進むとしよう。食料も減ってきているし、どこかで狩りをしないと。」

「ええ。しかし、ここにはあまり獣はいないようです。」

道中に食堂があるわけでもない。食料は自分たちで手に入れる。—

番、メンドクサイところだが、生きるためにはしょうがない。だからこそ、俺たち傭兵や冒険者はモンスターや獣、木の実やキノコに關してもある程度は知っている。もし、知らなかったら、生きて帰ることができないからだ。だいたいは実戦で覚えることができるが、最低限の劇薬の原料になるものとか、そういったものは覚えておく必要がある。

「木の実などもないようだな。ここには何もないのか？」

「そうではないはずですが、冬というのも関係あるのかもしれないですね。」

冬はほとんどの木の実はなくなる。それは普通なのかもしれないが俺たちにとっては死活問題だ。

「まだ焦る必要はないかもしれませんが、これからのことを考えると少し考えて食べたほうがいいですね。」

「そうだな。」

俺たちは何もなさそうな道を進んでいった。

赤眼のレリク篇 第三十一話

「さて、ここからだな。」

「レリクさん……。」

屍が転がっている。もちろん、それはすべてモンスターのものだ。大したことはないが、数が多い。だからこうなった。しかも、向かってくるのだからしょうがない。せめて逃げてくれたら楽だったが。

「ようやく抜けましたね。」

「そうだな。この砂漠を越えた先らしいな。」

「ええ。」

「それにしても森を超えてすぐに砂漠とは変わっているな。」

「始めてみました。」

「意外と神が喧嘩していたりしてな。」

「もし、そうだとしたら僕は遠慮したいですけどね。」

「俺は見てみたいな。神はどんな姿をしているだろうな？」

「案外、人の姿をしているかもしれませんよ。」

「ハハ、そうだとしたら笑えるな。」

この先に断末の谷がある。本当にこの先誰かいるのだろうか。この長い砂漠を渡って、何も無い断末の谷に行くメリットは一体何だろう？あいつが言っていた情報が間違っているとは思えないが、何か重大な裏が隠されているような気がしてならない。しかし、ここが不安要素なのは確かなのだ。俺たちが行かなくては他に行くような奴がいるとは思えない。さすがに俺たちでも生きて帰れるか分からない。死んでまで行くような人は俺たちみたいな知り合いが殺されたような人ぐらいだ。その中でも強いものと言ったら、数えるくらいしかないだろう。

ザッザッ。

靴が砂に埋まる。歩きにくいことこの上ない。太陽が昇っている。俺は砂漠には来たことがないから分からなかったが、ここまで熱いとは思わなかった。一番熱いのは靴だ。太陽で熱いられた暑さが靴に伝わってくる。これだとおそらく夜には水ぶくれができていることだろう。砂漠というのは不思議なものだ。きれいな川のように砂が流れている。ところどころに大きな岩がある。風化に耐えているというところだろう。しかし、いつかはここにあるような砂になるだろう。そう考えてみると人間の世界と同じような気がした。文明を発達させて、街を発展させて、戦争をして廃墟となる。この砂漠と何が変わるのだろうか？人という命を粗末にしている部分では明らかに人間がやっていることのほうがかなり悪い。

だが、オアシスというものがあると聞いたのだが、あるような気配は全くない。少しでも水があるようなところは砂ではなく土があるはずなのだ。そんなところはみたところない。少しでも休めそうなところがあればいいのだが…。

「外から見ているのにはきれいですね。」

「ああ。きれいだ。」

「しかし、熱いですね。」

「ああ。そうだな。」

「こんな動物もいるのですね。」

「砂漠だから。」

ギヤオオオオオオ

トカゲだな。エリマキトカゲの巨大版。いやー、でかい。

三階建てのビルを横にしたぐらいの大きさだぞ。

「どうします?」

「術で攻めるぞ。俺は雷で行く、お前は水で行け。」

「了解」

「水球。」

彼は丸いものが好きらしい。決していやらしい意味ではない。しかし。水球というのは便利だ。相手全体を水で覆ってしまい息をできなくする術だ。これによって雷が有効になるのだが、

「レリクさん、限界です。」

馬鹿が。図体がでかい相手にまともに使う奴がいるか。この野郎。これで雷が聞かなかつたらやばいぞ。

「雷槍」

貫くような雷を現わした術だ。直線状にしか聞かないが、直線状にいれば複数の敵をやることができる。

風穴ぐらいは開けたいものだ。図体がでかいから。

バリバリドキュン

うっん…。死んだのか?

「さすがですね。術エネルギー量が違つところも違つのですね。」

「まだ安心はできません。」

「雷獣」

雷の獣だ。そのように見せていて、相手にあつたら放電する追尾型の攻撃。

バリバリバリ。

ギオオオオ

絶命したか。こういうのが一番怖い。死んだと思って起きてきたらとっさに反応できないからな。

「死んだみたいですね。」

「ああ。」

赤絵のレリク篇 第三十二話

「食えますかね。こいつ。」

「どうかわからん。しかし、食うのはどうかと思うが…。」

「できれば食いたいですよ。食料もそんなに残っていませんし。」

「おい、お前あそのモンスター肉はどうしたんだ？」

「全部食べてしまいました。」

「食い意地張りすぎだろう。どれだけ食ったら気がすむんだ。」

「食べ過ぎるまでです。」

炎天下の作業は疲れる。確かに食料がないとは言え、全くもって嫌な作業だ。熱いのが嫌いな俺は地獄みたいなことだ。皮をはいで肉を取り出す。こういった作業はそんなに手間はかからない特に大きいと楽だ。小さいと難しいからな。どちらにしてもギルドにいつて必要な部位がどこに当たるのかよく見ないといけないのだが、今の状態では意味がない。荷物が増えるばかりだ。

「何とかして入りませんか？」

「馬鹿か？お前？」

「そう言わないでください。」

稼ぐときは少ない。それは傭兵や冒険者なら普通だ。能力がないものや運のないもの、そして裏切られる者。俺たちは常に後ろを気にしてはいけけない職業だ。自治体や警察みたいな公的なものを除く、職業では利用されることが多い。反対に一番に有効なものは名声。そういったものだ。それさえあれば、自分に不利な噂でも消されることが多い。信じあえる仲間がいればいいのだがそういった奴はごく少数だ。その中でこの一年を生きられる奴なんて限られ

ている。どんなに強い奴だって死ぬときは死ぬ。それが普通だ。

「しかし、こんな大きいとは。何一つ持って行けれそうにないですね。」

「ああ。ほっとけ。何か食べていこう。」

みる限り、砂漠砂漠砂漠砂漠…。もう飽きたな。

それにしても日が陰りだしたな。もう少ししたら寒くなるだろう。砂漠というのは生きるのには難しいのはこの点だ。仮にここで生きるとしたら、ずいぶんと服が必要なうえに軽装な服も容易しておかなくてはならない。引越し作業みたいな感じになってしまうな。あくまで術を使わなくての話だが…。

「レリクさん。寒くなってきましたね。」

「ああ。寒くなってきそうだな。どこか休めれそうところがあればいいのだが…。」

あれから4時間は歩いただろう。普通の人よりは早い俺たちの脚であつても先はまだ長そうだ。しかし、こちら辺は若干だが、砂ではなく土も含まれている。どこかに大きな洞窟でもあるかもしれない。魔物が住んでいるようなだが…。

「ありましたよ。何か嫌な雰囲気ですが…。」

「なんか嫌な予感が…するな。」

重々しい雰囲気な洞窟だ。もちろん、外が暗いということだからかもしれないが…。それにしてもここだけに洞窟があるなんて奇妙だ。そう思わざるを得ない。実際に洞窟みたいなものがあるとしたら、もう少し先だろうと考えていたのだが…。

「仕方ない。この先には他に何もなさそうだ。休まずに行くというわけにもいかん…。気を引き締めて向かおう。」
「はい。」

洞窟の中は案外広いようだ。俺はそう思った。松明を使用しないといけないということだ。ダンジョンではないと判断することができる。俺たちは普通に奥に向かっていった。それにしても、この洞窟は何もないのだろうか？俺自身の勘としては何かあると感じているのだが…。洞窟と言えば、あの日を思い出す。

「どうかしましたか？右目ばかり触っていますよ。」
「ああ。何でもないよ。」

さすがに昔のことを思い出したなんて言うことはできない。しかも、ロスはしつこくそのことを聞いてくるだろう。誰にでも話したくないことはあるというのに…。まあ、しかしここまでしつこい奴はいないだろう。

「さてと、ここまで行けばいいと考えてもおかしくないだろう。」
「そうですね。だいぶ奥まで来ました。」
「何もなければいいが…。」

嫌な予感がするのには変わりないが…。

「ここら辺で暖を取ろう。」
「寒くなってきました。砂漠はこれ以上に寒くなると言っていましたからね。すみませんが、先に番をさせてもらいます。」
「ああ。別に気にしなくてもいい。先に休ましてもらう。」

今の段階ではまだ耐えられるような寒さだ。まだ、焚火でもしていればなんとかなるだろう。俺は先に休ませてもらうことにした。

赤眼のレリク篇 第三十三話

しかしながら、そう簡単に事が進むとは思っていなかった。見張りをしてから2時間、そんなときにことは起きた。

「さてと、何か気配がするな。」

起こすか？俺は正直迷った。相手がどんな奴かわからないということはすごく不安だ。というよりは起こしたほうがいいか。起きていたほうが逃げることもできるだろう。

「おきな。」

「どうしたのですか、レリクさん。」

「何か来るぞ。」

「ええ。さてどうですか？」

「分かるか！」

しかし、モンスターではないように思える。ここまで来るようなモンスターはあまりいないはずだし、あのトカゲ以来一回もモンスターに遭遇していない。そう考えても分かることだ。こんなところに人が来ると考えにくいのも確か。もしかしたら、ウルゲイの手下かとも思ったが、あいつがわざわざ俺たちを引きとめるようには思えない。自分のことぐらい自分でやるだろう。そうでなければ、俺たちにこんな任務を押し付けるはずもない。

どちらにしても、ここまでくれば腹をくくるしかないのは当然。彼女ではないことは確かだ。

「どなたですかね？」

「さあな。しかし、操られている可能性も否定できないな。」

「ええ、厄介な能力ですよね。」

「ああ、人をばかにしているとしか思えない。」

「こんにちわ。久しぶりですね。」

「とうよりはこんばんわだがな……。」

「ここで何をしているのか、聞いてもいいですか。」

「ええ。ウルゲイさんからの使いですよ。」

「そうか……。では伝えてもらおうか。」

「伝えるものありません。」

「そうかい。ラリア、君には帰ってもらいたいものだ。できれば、手荒なまねはしたくない。」

「いえ、あなたたちの援護。それをするように言われてきました。」

「ふむ、そういうことか……。」

「よろしいでしょうか？」

「ああ。まあ、構わないだろう。1人が2人に増えたところで何も変わらない。それよりもしっかりと援護をしてもらいたいところだ。口スだけでは心もとなくな。」

「そうですね、精いっぱい頑張らせていただきます。レリクさん。」

俺たちは砂漠を歩いている。もちろん3人でだ。しかしながら、砂漠はまだ少しありそうだ。3日間歩いた。谷らしいというよりは山のような感じな気がするが……。

「こつちの方角か？」

「ええ。あつてますよ。もしかしたら、あそこに谷があるのかもしれません。」

「そうだといいいのだが、何せ行ったことがないからわからなくて当然なのだが、ここまでわからないと困る。」

つい二年前のことを思い出してしまうのはしょうがないことなのかもしれない。あれ以来、ダンジョンに敏感になったことは確かだ。

「確かにここで合っています。おそらくこの先が断末の谷でしょう。」

「そう願いたいね。」

この歩きにくい砂漠から早く出ていきたい。
熱いところは大嫌いだ。

赤眼のレリク篇 第三十四話

「ようやく着いたようだな。」

「ええ。ようやくですね。」

ようやくようやく…。砂漠の端に来た。長かった。4日も砂漠いたのだ。帰るとなるとぞっとする。砂漠が終わったと言ってもまだまだ先に行かないといけない。これからはそんなに時間はかからないはずだが。

「ここからそんなに時間はかからないと思います。」

「そうですね。」

「そのようだ。」

さて、ここからは歩いててもそんなに時間はかからないはずだ。

「それにしても下っているようだ。」

「ええ、坂はかなり多そうですね。」

砂漠を出てちよっとしたら、下っていた。昔はここに水が流れていたのだろう。そんな感じがする。それに沿っていけば、断末の谷があるはずだ。しかし、こちら辺には多くのモンスターがいるというのを聞いていたが、今のところ全く出ていない。確かに生き物がすみそうな場所ではないのだが…。

「モンスターがいませんね。」

「全くだ。嫌な予感しかないな。」

「好都合ですね。早く断末の谷に行きましょう。」

「さて、もうここら辺でいいだろう…。」
「そうですね。もう行く必要もないでしょうから。」
「何を？早くいかないと。」
「なんで早くいく必要があるんだい？」
「なんでって…。」

「ウルゲイさんは行ってくれと言っただけですよ。」
「それに俺たちは断末の谷に行くとはいってないのだが？」
「ばれてたの？あれま…。」

「さて、お前はアクアということでもいいのか？」
「う〜ん…微妙としか言いようがないな〜。」

「体は彼女のもので動いているようだな。もしかしたら、お前の術
を使えるのかと思っていたが、そうではないらしい。」
「そう考えたら、楽かもしれないですね。」

「まさかと思うけど、私をなめているでしょう。」

「やればわかることだ。」

キイイイイン

「風しか使えないなんて…。」
「1つの系統ならある程度は対抗できる。」
「そうですね。」

「竜巻。」
「火柱。」

「クツ、相性が悪すぎるわね…。」

「隙あり。」

キーン、キーン、

「エネルギー量が少ないわ、これじゃあ。」

「負けるかい？」

「!!!!」

ズバツ。

彼女の左肩から血が滴る。少ししか切っていないが、動きを止めるのには十分だ。

「勝てないわね。この体じゃあ。」

「それなら投降しろ。」

「フツ。この体は借りものだから、完全燃焼して返してあげる。」

「完全燃焼？」

『ダイヤモンドダスト』

あたりがどんどん氷漬けになっていく。

「ロス。こつちへ。」

「はい。」

「フレイムバーニング」

空気を直接暖める技だ。これならば俺たちの周りは凍らないだろう。氷の進行が終わったところにはリアは倒れていた。俺が駆け寄った時には気絶していた。おそらく、術をギリギリまで使ったのだろう。

「どうします?」

「連れていくしかないだろう?」

「しかし、」

「また、操られる…か?」

「ええ、言いたくはありませんが…。」

「そう都合はよくないだろう。実際には何かしらの制約があるはずだ。たとえば、今回のように気絶したら、呪縛から解放されるみたいな…。」

「そのほうが都合がよいと思いますが…。」

「ここに置いて行くわけにもいかないし、もし、解放されていたとしたら手掛かりが見つかるかもしれない。本当に彼女がそのような力を持っているのか?それとも、俺たちが思っているような能力ではないかもしれないし…。」

「レリクさんって優しいですね。」

「俺がか?まさか…。」

「普通の傭兵や冒険者は見捨てて行きます。命狙われて、しかも敵に操られているかもしれない人を助けることなんてしません。まして、これから帰ることも考えるとどう考えても足手でまといですし、何より運ぶのが面倒だ。別にあなたのことを攻めているわけではありません。それはきつとあなたが強すぎたからでしょうね。」

「何の話だ。」

「分かっているのならばそれで結構です。しかし、これだけは覚えておいてください。アクアは助けても助けられるような人ではないということを知っておいてください。あなたが殺さなくても他の誰かがアクアを殺します。それだけは確実です。」

「分かっている。分かっているよ。」

ロスの言うとおりだ。傭兵なる時の心得の1つを思い出していた。

それは「常に背中に気を配れ」。いかなる時も気を抜くな。後ろに敵がいると思え。そういった言葉だ。俺たち傭兵は前にも言ったよ

うに汚い仕事が多い。人に狙われることなんて多い。よくいうよな。あの人は戦争で死にました。どういった死に際か、あまり言わない。もちろん、分からないことが多いのは事実だ。その隊が覚えていたとしてもその隊の全員が死んでしまったら、全く分からなくなる。死体がどうなるかなんて分かっている。本当に悪い敵だったら、とらえておとりに使うこともある。というより、よく使う手だ。そういった中でいちいち味方の確認なんてできないかもしれない。それが災いするのが戦争だ。戦争は不幸か幸福なのかわからないが、人殺しの英雄ができてしまう。そういった人たちは上にいつて指揮するようになる。しかし、政治は苦手なことが多い。戦争が終わったかどうか。そんなものすぐにわかる。邪魔になつてしまうがない。だから、ある程度活躍して死んでもらったほうがいいのだ。直接、兵を指揮するのは彼かもしれないが、状況を把握して作戦を練るのはもつと上の人間だ。考えたくはないが、その先はもうお分かりだと思う。だから、傭兵は傭兵の指揮に従うのはここからきている。戦争後のやっかみを受けないからだ。あくまで自分の経験論からだが…。

そういったことが多かったからか、戦争のときには傭兵は敏感になる。死んだ、その事実は変わらなくても、味方に後ろから刺された。そういったこともなくはない。戦争に行くのは若いものが多い。手っ取り早く金が稼げるからだ。俺や口スみたいにいつの戦争にも参加するような奴は珍しいのだ。

「う、うん…。」

バツ。

俺たちはラリアから離れた。

「ここは？なぜ、ここに赤眼がいるの？なよっ子までここにいるじゃない？一体どういうこと？」

俺たちは顔を見合わせた。彼女は俺たちのことをあだ名で呼ぶ。それはよく知っていた。有名になれば、何回も会うものなんて限られてくる。

「どうやら、戻ったらしいな。」

「そうですね。気絶したら解放されるみたいですね。少しでも能力が分かってよかったです。」

「そうだな。対策を練ることもできそうだ。」

「それより、なんでこんなところに連れてきたのでしょうか？」

「何？」

「だから、これは彼女がおそらくかけた罠でしょう。しかし、あまりに陳腐だ。ラリアは弱くない。それでも僕たち2人に勝てるような力はなかったはず。もし、戦うにしても多くの傭兵が必要でしょう。電撃のルイ等がいれば別でしょうが…。どちらにしても、相手にはあまりメリツトがないように思えますが。」

「俺たちを誘き出す…。傭兵…。各国の情勢…。操る能力…。」

「ちよっと、私を置いていかないで。ここはどこで何をしていたの？」

「そうか、もしかしたら…。」

「何か分かりましたか？」

「急いで戻らないといけないな。俺の仮説が正しければ…。」

「「？」「」

無事でいろよ。ウルゲイ。

赤眼のレリク篇 第三十五話

「これは一体…？」

「遅かったか…。」

俺たちの目の前に見えるのは旧首都のウルゲイの町だった。もちろん、燃えている。街が燃えている。何回も見たことはあるが、嫌な感じだ。

「昨日、俺たちはラリアとともに話していた。

「さて、いい加減話してくれるんでしょね。ここまで来るのにも無言だし、答えてくれないし。ここどこだか分かんないし。」グダグダ…

ロスが目で合図してくる。俺だってわかってはいるのだが…。ラリアは女だ。確かに傭兵には少ないほうかもしれないが確かにいることとはいる。しかし、彼女ぐらいのレベルの人はいない。高根の花と云ってはそれまでかもしれないが…、反対に負けず嫌いというか…高慢になってしまった。

ということ、一回へそを曲げると少し大変なことになる。特に小言を言っている今は非常にまずい。言ったら、5倍になって帰ってくる。俺はどう切り出そうか迷っていた。

「言わないんだったら、無理やり吐かせるよ。」

こわ〜。目が死んでるぜ。こいつ…。

やばいですよ…。レリクさん…。

そう言われても、俺にどうしろと…。こういった場面はあまり得意ではないんだよ。

「さあ、話はするの？しないの？どっちかな…。」

俺が切り出すか…。

「まあ、座れよ。ラリア。たっついては話もできないだろう？」

「すべて話してくれる？」

「あ、ああ…。ある程度までなら話せる。しかしな、お前にまずは聞きたいことがあるんだ。」

「聞きたいこと？」

「今日は何日か知っているか？」

「はあ？いいけど 月 日でしょ？」

やはり、彼女の頭からは操られている期間の記憶がなくなっている。1週間前、彼女は何らかの形でアクアに会い、術をかけられた。そう考えて違いない。でもアクアはウルゲイにいてと考えていい。俺たちをウルゲイから出すために嘘の噂を流し、ラリアに術をかけて襲わせた。ラリアをつけさせたのはおそらく面識があるということを踏まえてだろう。油断したときに襲わせる。そういった手はずだったはず…。まあ、しかし、ラリアが風貌と違った性格をしていてくれてよかったと思う。もし、見抜いていなかったら、俺たちはウルゲイに帰るのがかなり遅れていたはずだ。それにしてもラリアがそう簡単にかかるとは思えないだが…。

「何を黙っているの。早く答えなさい。」
彼女の周りが冷たくなってきた。これは地雷を踏んだのかもしい。

「ま、まてよ。そんなに怒らなくてもいいだろ。説明するからよ。」
「だったら早くしなさい。」

俺は詳しく説明した。

「何か覚えていないか？」
「そういえば何か女の人が入りしたような気がする。でも、いくらでもいるし、これと言って変わった人がいたわけではないと思う。もし、私が術にかけられたとしたら、寝ているときしかないと思う。それでも、普段の私とは変わっていなかったかしら？」

変わっていても、それを言ったら殺されるかもしれないだろ。お前の性格上。俺は何とかそれを言うのを堪えた。

「それはいいとしても、なんでこんなに急ぐ必要があるのですか？
通った道とは言え、3日で行くのはどうかと思ってますよ。そろそろ理由を聞かせてください。」

「分かっているかと思うが、今回の罠は俺たちを倒すことではない。俺たちをウルゲイから遠ざけることにあった。ウルゲイを狙う理由はおそらく仇打ちとかそういった者だけではないように思う。何かあそこに隠されているのだと思う。そうでないとしたら何かしら施設があるかということ。」

「何かの施設？一体何があるというの？」
「それが分かれば苦労はしない。しかし、あるとすればダーク・デビルに関する施設だろう。それしか考えられない。」
「だとしたら、急がないと...。」

「急いだからといって何が変わるわけでもない。もう十分急いでいる。今日はもう休んだほうがいい。明日は何かあるかもしれない。おそらく昼ごろには着くはずだ。その時にはちゃんと行動できるようにするんだ。」

正直、予想外だった。こんなになっているとは思わなかった。ところどころ、完全に消失している。人間が逃げまどう姿。火を消そうとしている姿。死体。そういったものが所狭しと並んでいる。これはおそらく秘密にされることだろう。もちろん国外にはだが…。

赤眼のレリク篇 第三十六話

「どういうことですか。」

「もう分かっているだろう。空を見ても。俺は詠唱する。お前たちは人を助ける。」

上にはバハムートが旋回していた。もちろん、乗っているのはアクアに決まっている。

俺は詠唱を唱え続けていた。

「不死鳥…頼むぞ。バハムートを倒しに行くぞ。」

俺たちは上へと飛び立った。

「火炎放射」

「不死鳥避ける。右へ旋回。側面から羽を狙って、炎を当てる。」

撃ち落とすのが空中戦では一番効果的だ。それを可能にするためには羽を狙えばいい。

「降下。後ろから氷を放て。」

相手も一筋縄ではいかない。

「左に旋回。正面から炎を出せ。俺が霧を作る。その間へ、上空へ。降下で爪で切りつける。」

ヒュン。ヒュン。

俺の隣を氷な槍が通る。頬に一筋の赤い線ができる。

火球が不死鳥の口から放たれる。それが氷を相殺する。

その間に水蒸気ができる。それを

「ダスト」

冷やすと霧になる。一時的だが、目くらましにはなる。

上空へ行ってみたが、相手もそれをよんでいたらしい。

「空中戦もできるの。すごいなあ。これでも結構練習したんだけどね。それにしても、不死鳥って結構大きいよね。びつくりしたよ。」
「そりゃ、対になる鳥だから当然、大きいに決まっている。さてさて、どうしたものかね。これはよくも俺たちをコケにしてくれたな腹立つぜ。」

「フツッ、あなたでも急なことでは対応できなかったみたいね。でも、彼女は余計だったみたい。簡単に負けちゃったし。それにこれ以上は全く意味がないから、逃がしてもらいたいのだけど。」
「そうはいかねえよ。お前が何を狙っていたのかわからねえし、何よりお前を倒さないと気が済まない。」

「しつこい男は嫌われるよ。じゃあ、ねっ…うわ。」

「逃がさねえって言ってるだろう。フレイムアロー。」

「ブルーバリア。」

「雷撃。」

「粉塵。」

「葉嵐」

「火炎」

「ちっ。上空へ。」

「上がりなさい。」

俺は槍を握りしめた。

「おりゃあああ。」

俺は空中に身を投げ出した。目標はもちろんアクア。上昇している彼女に向かって槍を突き出した。彼女の隣を突き抜ける。そして、バハムートの上に乗った。

キーン。キーン、

彼女の腕に傷が、俺の額に傷ができた。

「やるじゃねかあ。」

「あなたも…。」

俺は彼女の心臓を狙って槍を突き出した。彼女もそれに答えた。しかし、互いの力が反発し空中に投げだされた。

「不死鳥」「バハムート」

ドサツ。うまく着地はできなかったが。助かったようだ。

お互い体勢を立て直し、再び突撃しようとした時、
ヒュンヒュン。

みると大量の矢が俺たちに向ってきていた。

「くそ。警兵が出てきたか。フレイムバリア、アイスバリア。」
「やば、火炎、土石。」

「「降下」」

この場合では上上がるのが正しいのかもしれないが、上空は空気が薄すぎる。俺たちが上がっているころには意識がなくなっているだろう。警兵がいるところでは、避けきるのは難しい。常に移動して的外すのが精いっぱいだ。

「なんで邪魔をする…?」

「バハムート。最大の力で破壊光線を放ちなさい。できるだけ広範囲に打ちなさい。」

「「「「「「「「「「シールド」」」」」」」」」」」

あれは国の術師か?ここまで集まることはそうないだろうな。

いくつもの層ができていく。目にはつきりと見えるほどの強いシールドだ。そう簡単には破れはしないだろう。警兵もシールドの中に入るために移動している。矢が飛んでこない今ならば、俺は別の仕事ができる。

「不死鳥。ギリギリまで降下してバハムートの下につけ。そこから腹を切りつける。」

本当は羽を傷つけたほうがいいのだが、バハムートは羽が固い。下から攻撃ではおそらく傷つけることはできないだろう。だから腹に狙いを定めた。不死鳥と違い、復活できるわけではない。傷つければ何かしら障害が出るだろう。

「バハムート、やりなさい。」

口から大きな飛球ができている。そこからビームみたいな感じのが出るのだろうな。直撃したら簡単に死ねるな。

「「耐えろよ。」」

あそこにはロスとリアの姿がある。

その姿があるとなるとちゃんと仕事をしたようだ。

「破ってしまいなさい。」

コオオオオオ

バキバキッ

シールドが壊れ音が聞こえる。透明なシールドが真っ赤に染まっている。

「結構、固いわね。」

「今のうちだ。下に回り込め。」

パン

ついにシールドが破られたようだ。しかし、あの下の膜は何だ？

「？」

ピイイイン

ギオオオオ

破壊光線がバハムートの翼を貫いた。

「こんな術があるなんて…。バハムート、飛べる？」
「今だ」

「！！！！」

ブシャアアアア

赤い血が雨のように降ってくる。不死鳥の搔爪がバハムートの腹に食い込んでいる。

「戻れ、バハムート。」

アクアはすでに空中に身を投げていた。下には大勢の兵士。上には俺がいる。ロス、ラリアもいる。今回こそはもらったぞ。アクア。

「予想外。でも切り札つてのは切り札でなくなった時に使うのよ。レリク。分かってる？」

「？」

そこに目を覆う光が入ってきた。

「くそ。目をふさがれた。」

目くらまし。この状態ではなかなか、回復しない。こういった術のときはわざわざ治療はしない。帰って悪化することが多いからだ。俺は、火の術を使って体温を感知しようと思ったが、人が多すぎる。もっと少ないときには有効だが、今のような状態では意味をなさない。体温は術を使うことでかなり上がる。運動しているときと一緒だ。術師が多くいるところでは全く意味がない。

「不死鳥。戻れ。」

もうあいつはバハムートを呼ぶことはできまい。前の戦いでそれぐらいは分かっている。

「早く探せ。」

ウルゲイの声も聞こえる。

しかし、下から意外な声が聞こえてきた。

「彼女はやらせない。」

そこにいたのはルイだった。

どういうことだ？ルイはもともとこの国にはいないはずだ…。

ギルドが持っている情報というのは何も国とか大きな情報だけではない。もちろん、国にもパワーバランスというものがあるが、それと他にギルドにもパワーバランスというのがあるわけではないが、戦争時以外のときには常に強い傭兵や冒険者は出入りをチエツクされている。何か不測の事態が起こった時に対処するためだ。名の売れたものはそういった徴収に参加しなくてはならないときがある。そんなことはあまりないが…。だからこそ、今回は入念にチエツクしていた。連れが強い傭兵である可能性も否定できなかったからだ。そこにはルイの名前はなかったはずだ。それはロスにも確認を取っていたはずだ。

あいつとは何回か任務で一緒になったことがある。雷しか使えないという変わったやつだが、その使い方が抜群にうまい。今回の術も瞬間に大量の光を発行するようなエネルギーを瞬時に使わなくてはいけない。コントロールが並はずれてうまい。

「電撃のルイか…。彼までも操っているとは…。しかし、この量だ。矢を放て。」

ヒュンヒュン

大量の矢が彼女らに降りかかる。だが、意味がないのだよ。あいつには…。

大量の矢は彼の目の前で消えうせた。

電子を分解したのだ。ここまで大量の弓をできるとは思わなかったが、彼の腕についているマラリスがそれを可能にしているのだろう。予想以上に強くなっている。

ここは市場だ。見通しもよく、人の出入りも容易にできる。ここに追いつめたウルゲイの手腕は確かだろう。しかし、もう一押しが足りていない。俺が行かなくてはならない。ギルドと国が協力するなんてないことだ。これで駄目だったら、国で対処することになるだろう。それよりもアクアが政治を行うものを操ることを考えたら、今、ここでとらえることが必要なのだ。

「行くぞ。ロス、ラリア。」

「フフツ。また今度ね。」

「マジックアイテム!!」

彼女らは俺らの前から消えた。

マジックアイテムとは何百年も前に術師が作った道具だ。いろんな能力を付与している。実際には他の人に分からないので難しい問題

ではあるが、有名な人が作ったものはよく知られている。しかし、今ではマジックアイテムを作れる人は存在していないため、貴重なものとなっている。問題なのは分かっているマジックアイテムの存在だ。それがどんな効果を持つかわからないため、不幸な事故になることもある。今彼女が持っていたのは転移できる代物だ。二つの指輪がセットになっており、その指輪があるところへ転移してくれる。マジックアイテムはアイテムなので、一回使ってしまうもう使えなくなってしまう。有名な術師は数や種類を記していることが多いのでこのマジックアイテムは最後はずだ。

「結局、逃げられてしまったな。」

「ウルゲイ、お前知っていたな。」

「ああ。しかし、確信がなかった。お前にいつてもらわなければ、彼女を誘き出せなかった。それにしてもここまで能力を持っているとは思っていなかった。お前からもつと情報を仕入れておくべきだった。聞いていれば対策も立てることができたかもしれない。まあ、最後のバハムートには驚いた。あんなのと同等に戦えるとはお前も十分化け物だな。」

「ほめことばと受け取っておく。とりあえず、お前の知っている情報をすべてもらおう。今さら、とぼけるなよ。今のお前なら俺には敵わない。アクアと俺は違うからな。」

「まあ、いいだろう。言葉によっては国に喧嘩を売っているという見方もできるのだがな。」

「1週間は待つことにしよう。しかし、それが過ぎたときにはどうなるか分かっているな。ラリア、ロス、行くぞ。」

「はい。でも宿が壊れていなければいいですね。かなり損傷していますから。大半は壊滅していますよ。まあ、この近辺であるならばという話ですが…。」

「まあ、どこでもいいじゃない。たかが1週間だし。」

俺らはその場を後にした。

「それにしても、強かったですよ。」

「そうなのか？」

「ええ。操られているとは思えなかった。統率、能力、術も最大限まで出されていたと思います。それにしてもその場で全員が気絶というのはかなり妙です。」

ロスとラリアはアクアが操っていると思われる奴らと戦闘していたらしい。その時の報告を聞いているだが、どうやらウルゲイの報告とは少し異なっている部分がある。ウルゲイは攻撃して気絶させたと言った。しかし、どうやら気絶させたということではなく気絶したということなのだろう。どうやらエネルギーが切れると気絶するということだろう。不可解な能力だが、複数の人数を操ることができるのだろう。ロスの話聞く限りはたくさんの人を操ることはできない。

ロス・ラリアが1人ずつで相手にするには限界がある。

多くても10数人ぐらいだろう。しかし、問題なのはかなりの指示を出せるほどの操れる人間だ。ルイもそうだったし、ラリアもそうだった。2人ほどの人間が操られるとなると、対応策を練るうにもどうしようない。

「厄介ですね。ルイほどの奴ともなると、そう簡単には行かないですよ。」

「そうね。彼は危険だわ。できれば、仲間にしたかったところだけ

ど…。」

「そうはいつでも、どうしようもない。彼女の居場所も分からないから動きようもない。」

これからの対策としてはルイをどうするかということになりそうだ。今回は惜しかった。本当に惜しかった。もう少しかった。あと一押しなんて言う感じではなかった。勝っていたように思う。俺としてはこれで終わりしようとしていたので正直ショックだ。マジックアイテムでどこに消えたなんてわからない。1からの振り出しに戻ってしまった。ここまで来るのに2年かかった。また2年かかるとなるとかなりしんどい。

彼女は2年間の間にもっと強くなっているかもしれない。俺はそれが怖かった。2年前のあの日、俺はマリリスを持っていなかった。それが原因ということではなかったが、マリリスのおかげで強くなったのも事実なのだ。今回のような幸運がそう何回も起こると思えない。むしろ、二度目はもうきつとないだろう。俺はそれをずっと考えていた。

どうすればいいかなんてわかるわけではない。戦うこと、そして彼女を止めること。それを俺は目標にここまで来た。しかし、もう彼女は止まらないだろうし、止めるためには最悪の方法も考えなくてはならない。2人だって、許しはしないだろう…。俺がやるしかない。俺がやるしかないのだ。

「どちらにしても、今は復興を手伝うしかありませんね。その中で証拠が何かあればいいのですが…。」

「まあ、ないだろうな。だいたいあるわけがない。操られているのだから…。」

「その証拠はないわ。でも、彼女がどうやって操ったかという証拠

はあるかもしれない。」

「それはどういうことだ。」

「私は操られています。しかし、その前に何かしらアクションがあるはず。」

「術に詠唱があるようにか？」

「そう。その通り。」

「ふむ。それが分かれば逆に裏をかけるかもしれない。」

「そうですね。」

「やることはそれでいいか。」

「そうしましょう。」

俺たちは解散した。

俺は月夜が照らしている道を歩いていた。

一人で歩いていた。やっぱり一人で歩くのはいいな。そう思った。ここ最近、ロスと一緒にだったし、リアもついてきた。アクアがどういった状況か分かった。自分はもうやら甘かったらしい。あのダーク・デビルさえなくなってしまうえば、彼女は治ると思っていた。むしろ、治ると信じたかったのかもしれない。心はどうやらあつちに片向いているのかもしれない。あのまま、彼らと一緒にいてしまつては不味いことになるかもしれない。

やっぱり一人でいるのがいいのだ。

「さてと、どういうことか説明してもらえますか？」

「そうですね。私にも教えてもらえますか？」

「2人ともどうした？」

「それはこちらのセリフですよ。今さらどこへ行くつもりですか？」

「うん…。急に用を思い出してな。」

「そう…。レリク。あなた死にたいのね。」

「なんでそうなる？」

これはどういうことだろうか。あいつらには眠り薬を持ったはずだったが…。どうやら俺が思ったようにはいかなかったらしい。それにしても、あいつらは本当に強くなった。ラリアはもともと強かった。というよりも2人は単純に判断力がついただけのよう思う。慎重にやることはいいことだが、それがかせになってしまふことはよくあることだ。

ウルゲイに言われたように俺はある国へ行こうとしていた。もちろん、あまりいい国ではないのは確かだろう。今あそこの国は不味い状況にあることは十分知っている。しかし、俺はそこに行くのはある理由があるからだ。

彼らを連れていくわけにはいかないのはそのためだ。彼らがいるとややこしい話になる。ただでさえ彼らは優秀な傭兵なのだ。

「さて、そこを通してもらおうか？」

「断る」

「どうしてだ？お前たちにはもう十分働いてもらった。結局は失敗したが、仕方のないことだ。ウルゲイからもちゃんと報酬をもらっただろう？」

「そういうことではないということが分かっているはずよね。私たちは彼女を殺すためにあなたについてきたのよ。捕縛できるなんて考えてはいなかった。」

「その通り。難しい問題かもしれないね。レリクさんにとっては…。」

彼女が何よりも大切そうですからね。あなたのことを監視してましたよ。すみませんが、そうするしか方法がなかった。あなたの強さについても秘密な部分が多かったのは事実だから。」

「すまないが、そこをどいてほしいのだが…。」

「ごくことはできませんね。むしろあなたが引いてほしいところです。」

「じゃあ、やることにしよう。」

「正気ですか？先ほどまで仲間だったのに。」

「人の気持ちは変わるものだ。ロス…。」

炎帝

「何かしら。あれは…。」

「分からない。自分に炎を纏わせているのだろう。きっと何かしら、術を複合させているのだろう。彼だからできるのかもしれないな。」

「対抗するのは水と氷、土ということになる。」

「じゃ、やりましょうか？」

「ええ。」

「話は終わったか？」

遠くから爆発音が響いていた。

「俺に…勝てるわけがないだろう?」

初めにみたものは周りの木々は焦げていたと言っている…。

まるで、ドラゴンが到来したようだ…。

2日後、ギルドの壁にあるものが犯罪者として指名手配された。

赤眼のレリク…特級犯罪者。生死問わず。

レリクは街の夜を歩いていた。

夜を歩くというのは適切な表現ではないのかもしれないが…、昼を歩くことができないのだからしょうがない。

金は十分にある。しかし、このままでいては彼女の情報すら手に入らない。

俺は実行に移すことにした。

「あんたか…。いつか来ると思っていたよ。赤眼のレリク。金がな」とやっていけないだろう。」

表向きは怪しげなバーだが、本当の仕事は裏ギルドだ。怪しげというので分かるかもしれないが、実際は別の仕事をしている。武器の密売とか、麻薬の売買、賞金首を持ってきたり、死体を処理したり…。犯罪という犯罪はすべてやっている。

見た目はバーであるのは確かだ。ちゃんと酒を置いてある。普通のバーよりもたくさん酒がある。棚にはぎっしりと瓶が詰まっており、そこに名前の札が貼ってあるものもある。誰かが置いていったものか、もしくはキープしているのだろう。それなりに人が来ているのがわかる。しかし、すべて犯罪者には違いないが。ここに収容できる人数は20人弱か…。それほどに広くはない。だが、そこに置いてある家具は新しいものである。おそらく結構な稼ぎがあるのだろう。副業が本業なのだろう。まあ、どこも同じか…。

主人は目が濁っている。もちろん本当に濁っているというわけではなくて、心が濁っているからそれが目にも表れているそうだったところか…。

「少し血の匂いがする。」

「ええ、まあ…。何というか…。分かっていただけとありがたいのですが…。」

「分らないということはない。ただ…。」
「ただ？」

商売ではお客は神様という言葉がある。人が来てくれないとものを買ってくれない。そういつた言葉だが、ここでの意味は少し違ってくる。信用を失えば、任務を提供されないということではない。反対に殺されることを意味する。異常かもしれないが、もし、追手をかけられることを思えば、主人を殺しにくるし、こちらが戸惑っていれば犯罪者として殺される。

双方の利益が一致しているときだけは一時的に同盟を結んでいる状態にあるだけだ。どちらかの都合が悪くなれば、すぐにどちらかが消されることになる。しかし、立場上裏ギルドのほうが仲間が多い。そういった意味でも犯罪者は必死だ。犯罪者は堂々と表の道を歩くことすらできない。だから犯罪者はさらなる犯罪を生み出してしま

う。

「今回、殺されたのはどういう奴なのか、それを教えてほしい。」

「それはどういう風にとらえればいいのですか？犯罪者の名前ですか？それならお断りするしかありませんが？」

「いや、どういう犯罪をした者か…。それを聞きたい。」

「それだけでしたら、話せないこともないですが…。」

「これじゃあ、足りないかな？」

赤眼のレリク篇 第三十七話

「弱りましたね。」

「何かあったのか？」

「いえ、このことを口にしないように口止め料をもらっているのですよ。」

「じゃあ、その名前を教えてくださいませんか。」

「わかりました。こっちの口止め料はもらっていませんからね。名前はアクア。あなたならご存知かと思いますが…。それにしてもこの金額を払える人なんてそうはいないですよ。」

「それなりに金は持つている。いろいろやってきたからな。」

「まあ、気にはしませんか…。しかし、レリクさん気を付けたほうがいいですよ。あなたは名が売れすぎていますから、いろんな方に狙われることになります。」

「お前にもか？」

「いいえ。あなたにはかなわないことを私はよく知っていますから。犯罪者になってもう一年ですからね。今までどうやって生きてきたのかというほうが気になります。追手も殺してはいないようですよ…。」

「お前が期待しているような旅はしていないと思うぞ。」

「そうだとしても聞きたいというのは本音ですが…。情報は伝えましたよ。それとアクアさんから伝言を預かっています。」

まあ、俺がここに来ることは予測できるだろう。俺がアクアを調べられるように、アクアも俺を調べていたようだ。あれから一年。俺はもちろん隠れながら行動していた。隠れていたのは捕まらないようにという単純な考えもあるが、姿をくまますことによって彼女をおび

き出そうとしていた。彼女には国以外には敵がいらない。敵は多数いるが彼女の強さに匹敵する者がいない。ただそれだけだ。俺自身も一人ではかなわないのはよくわかってる。だからこそ、一年という歳月には十分に意味のあるものだった。

「生きる媒体がある限り私が死ぬことはない。って何のことですか、これは？」

「さあな。伝言は受け取ったと伝えてくれ。他人には漏らさないように頼むぞ。漏らしたらアクアが殺しに来るだろうからな。」

「分かってます。あと、これが頼まれていた物です。気を付けてくださいね。これはこの国では扱ってはいけない代物ですから。」

「分かっている。また、金をもらいに来るかもしれないな。」

アクアの殺しの傾向がどういったものかを調べた。表向きは普通の犯罪者として扱われているものがほとんどだが、そのほとんどが国との取引があったものばかりらしい。もちろん金みたいなものもあれば、家族を人質に取られているような科学者や技術者も多くいる。彼女との関係はどういったものかは分からないが、間接的に彼女を殺すもしくはダーク・デビルを奪うためにやろうとしていたのだらう。彼女を殺すのは難しいと分かっていたはず。どうして多大なる犠牲と汚名、そして隠匿してまでもダーク・デビルを手に入れる必要があるのか。俺にもそれは分からなかった。俺などが持っているマラリスとダーク・デビルの違いが何かあるのかもしれない。

夜中に行動するのは気持ちいいと思える。マラリスのおかげで、冬でも少し涼しい程度に体温が保てるからだ。野宿はどこでもするこ

とができるし、何より風邪などにもひかなくなつたし、感染症なども移ることはない。夜風はすごく気持ちがいいものだ。だが、それは別に殺気立つたやつらが多いのは否定できない。女性は夜、歩くのは危険な行為だ。強盗なども男よりも女のほうが被害が多発している。腕力が少なく、脅しやすいというのはあるが、彼らにとつてはその後のほうが大事なのだ。

「おいおい。お譲ちゃん。金だけ置いていけば見逃してもらえなんて甘いこと考えてはいないだろうな。この後も付きあつてもらつぜ。」

「どうしてですか。もうお金は持っていませんし、これから大事な用があるのです。」

「お金はもういい。付き合ってもらつていっても1時間ぐらいで済むと思つぜ。体のお付き合いだからな。」

「いや。」

こういう輩が多いのは致し方ないのかもしれない。だからと言ってほっとくわけにもいかない。

俺は声の聞こえるほうへ駆け出していた。

お詫び

今まで更新せずに申し訳ありませんでした。

また、書き始めたのですが、

内容が少し変わってしまったため、また新たに「改訂版」として、

更新を始めて行きたいと思います。

お気入りに登録していただいた方には大変申し訳ないです。

早ければ今週の土曜日くらいには改訂版を新しく投稿します。

こちらの小説は完結とさせていただけますので、ご了承ください。

もし時間がありましたら、これからも「デビル・ジュエリー」読んでくださればと思います。

これからもよろしくお願いします。

作者・ボロズ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9127r/>

デビル・ジュエリー

2011年11月8日00時07分発行